

北海道は、樺太山系の一部として、宗谷岬から襟裳岬に至る迄の北見山脈、及び日高山脈によつて、東西が判然と二分せられ、これによる東部は、雄阿寒・雌阿寒をもつてゐる千島火山脈と共に、分水嶺をなして、多くの河川を北・南・東斜面に養ひ、以て十勝平野・釧路平野・根室平野及び北見海岸平野などをつくり、一方、これに對して西部は、駒ヶ岳・マッカリ・樽前・有珠をもつてゐる那須火山脈と共に分水嶺をなして大きな石狩平野を始めとして到るところに、小さいながら多くの河川平野を展開せしめてゐる。また中央の北見・日高の山脈と、天鹽・夕張の山脈との間には、富良野・旭川・名寄の盆地群を發達せしめ、東西を結ぶ交通上の中央低地としての著しい役割を演ぜしめてゐるのである。

これで簡單ながら、地勢の説明を終つたのであるが、そこで前に反つて、平野の機能に就いてみるに、平野は、生産の直接的手段としては、廣く農産物を決定してゐるのであつて、昭和四年には、壹億四千參百萬圓の農産物を出し、その中でも、約五千五百萬圓の米と、約壹千七百萬圓の麥とが、主なものになつてゐることは云ふまでもない。が、その他大豆・小豆・黍・蕎麥・玉蜀黍・馬鈴薯などの各作物面積は、何れも内地の第一位を占め

以て多大の生産額をあげてゐるのである。特に米は、比較的高温で多雨な西部地方に作られ、石狩平野には内地と同じ様な水田が見られ、また旭川附近の上川地方も高地でありながら、よく米田が開けて産額も相當に多く、上川米或は旭川米として廣く知られてゐる。米が西の比較的濕潤な地方に産せらるるに反して、畑作は東の高燥な地方に盛に行はれ、豆類・亞麻の産が多く、とくに河西と網走とはその産額が多く、なかでも河西は、北海道總産額の四八%の豆類と、三八%の亞麻とを出してゐる。

北海道が大農法によつて多くの家畜や機械を使用して規模の雄大、耕地の壯大である點に至つては、内地の規模の小さい耕作景とは比較にならないところで、今日既に人口一に就いての農産物価格は、内地の約四十圓に對して、北海道は實に約五十五圓となつてゐるので、これは岡山縣に次いでの高率であるが、廣く土地に對しては、まだ高度化の集約經濟が行はれてゐないので、ここに北海道の農産物には有望な將來が認めらるるのである。

その他果物では、青森縣に次いで蘋果や櫻桃もあるが、氣候的關係からミカン・ネーブル・夏橙などの柑橘類や、柿や、葉煙草や、甘蔗・甘藷・茶などの生産は全然なく、桑

の畑も僅かで、従つて繭の生産も少なく、僅かに七萬七千圓を出して、内地のどの縣よりも遙かに低い産額を示してゐる。これからみても氣候の影響が如何に強くはたらいてゐるか、といふことを認むることが出来るのである。

更にまた平野及び裾野が、直接的生産手段として働いてゐるのは、好適な氣候と相俟つて廣大な牧場がよく發達してゐることである。即ち北海道は平地面積に比較して、人口密度が稀薄で、農業に對する勞力が、不足してをり、その上、降雨も少ないので牧畜がよく發達してゐる。特に狩勝峠から見下ろす彼の十勝平野の大スロープの草原は、最適な自然的牧場で、このほかにも農業に適しない日高・十勝・釧路・根室にはいたるところに牧場が發達してゐる。勿論東部と西部とは氣候的關係から多少趣きを異にし、西部は雨が多いために、これに應しい牧草による牛が盛に飼養され、東部は乾燥するために、これに應しい牧草による馬が到るところ放牧されてゐる。特に北海道の馬は内地第一位の二十七萬頭で、この内、河西が二三%、網走が一六%、釧路が八%、根室が六%の割合で、西部が五〇%以上を占めてゐる。また細羊は五千七百頭を數へ、月寒・龍川などの牧場で盛に飼育

されてゐる。その他二萬六千頭の豚とか、百八十萬羽の雞とか、九千箱の蜜蜂とか、が飼育されてゐる。しかし、牧畜としては何といつても馬が第一で、馬の頭数は内地の六分の一を占めてゐる。が、一方これに對して牛は少なく、僅かに四萬二千頭で、内地の第十二位にある。しかし、牛乳搾取高は内地第一位で、煉乳・粉乳・バターの製品は、我が國の生産を支配してゐる有様である。

かかる關係から、北海道には到るところにみごとに牧場が發達し、明治二十三年以來の日高に於ける新冠御料牧場を始めとして、月寒・眞駒内・平手などの牧場は有名であり、また釧路の白糠及び標茶には軍馬育成所があつて、大樂毛とともに主要な馬の集散地となつてゐる。實に大農法式による農具を用ひて、牧草の收穫や乾燥を行つてゐるのは、内地では北海道があるのみで、二頭立の馬車を駛走して牧草を刈つたり、これを高く積上げたりの風景は、全く北海道だけにみられる固有な景觀で、かかる長閑な北海道の牧場景觀も、これが發生は地理的諸條件の所産である、と見ても敢て差支へはなからうと思はれるのである。が、兎に角我々は、ここでは北海道の平野が、氣候と相俟つて寒冷的農産物を

決定し、放牧の發達を促す一大手段として、充分な機能を發揮してゐる、といふことだけをみれば、それで充分であらう。

(四)

更に第四の地理的條件として山地が、北海道の經濟に與へる影響は、大森林と炭田とを通じて、その用材及び石炭を提供してゐること、この兩者は、北海道に於ける重要な生産物となつてゐるのである。

先づ北海道の林業をみるに、北海道の林野面積は、約五萬四千平方キロで、北海道全面積の約六割七分を占めてをり、これは丁度全面積の七割を占めてゐる森林國・フィンランドと非常によく類似してをり、フィンランドが輸出貿易の七割までを林産額によつて占められてゐると同じ様な重要さを、我々はこの北海道の森林に於て是認することが出来るのである。もともと北海道の林業は、延寶三年、始めて檜山奉行の許に開かれた、江差の檜山が、古來から有名であつたが、この西部地方の森林は、その後の濫伐と、山火事とのた

めに、次第に荒廢に歸せしめられて、今日では僅かに薪炭林を残してゐるに過ぎない状態である。が、これに對して一方、東北の北見・天鹽地方や、中央の十勝・日高地方には森林が多く、蝦夷松・榎松などの用材や、製紙原料が盛に供給されつつある。とくにエゾ松・トド松屬は、製紙原料としてひとり北海道ばかりでなく、遠く内地の工場に廣く使用されてゐるので、その重要性は鉛筆材に供せられるオンコの木と共に益々増大しつつあるのである。その他、カツラ・シナノキ・イタヤ楓・ニレ・白樺・ミヅナラの用材も多く、中でも西洋家具の原料とされるミヅナラは三百萬圓も輸出されてゐる有様で、この他に、マチ軸木とか、箱材とか、安下駄とか、器具材とか、に使用される潤葉樹材も相當に多い。昭和四年に於ける用材の産額は約壹千七百萬圓で、その多くは内地に移出されてゐるが、一部はロシア・支那・印度・濠洲・アフリカ・ヨーロッパなどに輸出されてゐる。この用材の産額に、約四百萬圓の薪炭材と約八百萬圓の造林用種子その他を合計すると、北海道に於ける林産額は、全體で二千八百萬圓の巨額に達し、水産及び鑛産に次いで、林業は北海道に於ける重大な産業になつてゐるのである。北海道の森林蓄積は、針葉樹が七億石、

潤葉樹か十四億石で、内地の約六〇%を占めてゐると云はれてゐるが、森林の開発と保護増植とは、ゆるがせに出来ない問題で、單に製紙原料に關する限りに於てさへも、森林の増植は大切である。だからこそ、札幌・釧路・網走・旭川に營林區署が置かれ、その他函館・檜山・室蘭・帶廣・根室・天鹽……などの十四ヶ所に營林分署が置かれて、銳意、森林の管理が行はれてゐるのである。

更にまた北海道の山地が、直接的生産に與へてゐる貢獻は、鑛産物資源を埋藏して、工業の原料を供給してゐることである。石狩炭田と釧路炭田の一部とからは、盛に石炭が採掘されて、他の炭田とともに年額五千萬圓の石炭を出し、これに壹百六十萬圓の金と、壹百二十萬圓の硫黃と、七十萬圓の石油などを合計すると、昭和四年に北海道は五千四百萬圓に達する鑛産物を出してゐるのである。これは福岡一縣の壹億四千萬圓の鑛産額に比較すれば、遙かに劣つてはゐるが、それでも内地の一五%を占めて、内地第二位の産額を擧げてゐる盛況さである。

(五)

更に第五の地理的條件としての海岸をみるに、これはベーリング海、オホツク海からの寒流と南から來る暖流とに相俟つて、北海道をして水産業を發達せしむる可能性を與へてゐるのである。

北海道が、如何に水産業の發達してゐるかは、昭和四年に於ける四千五百萬圓の漁獲物と、五千五百萬圓の水産製造物との産額を見ても解るのであつて、この合計して一億圓に達する水産物は、世界總漁獲高二十億圓の一七%を占めて斷然第一位にある我内地漁獲高の三分の一を占めてゐるのであつて、如何に北海道の漁業が我國の漁業に對して、また世界の漁業に對して、重大な役割を演じてゐるかが解るのである。

北海道に於ける漁獲物の主なるものは、云ふまでもなく約壹千壹百萬圓の鯨で、春鯨は四月上旬産卵のために群をなして、海水を濁らしつつ西北の近海に殺到し、これがために附近一帶の漁村は急に活氣付き、資金と勞力をこれに集中して、男女が協力奔走する有様

は、これまた北海道だけにみらるゝ漁村風景であつて、昔は福山・江差・壽都・岩内などが鯨漁の中心で、わけても江差の如きはその大中心地であつたが、最近ではその中心地が段々北方に移動して、今日では余市がその一大中心地となつてゐる。が、余市より少し北にある増毛・留萌などにも、鯨漁が盛んに行はれてゐる。そして鯨から得られる搾粕は、今日では化學肥料や、滿洲の豆粕などに壓倒されてゐるが、それでも尙五百萬圓の産額を出してゐるので、鯨とその肥料とは、合計して約二千萬圓の巨額に達し、これが北海道水産の太宗をなしてゐるのである。

更にまた五百六十萬圓の烏賊は、主として南方の近海で捕獲され、大部分は鰯として支那に輸出されてをり、また四百七十萬圓の鱒は、ほとんど全道の海岸から獲られるが、姫鱒は支笏湖の養殖からも漁獲される。また三百萬圓の鮭は、石狩の石狩川産と、根室の西別川産とによつて代表せられ、また三百五十萬圓の昆布は、渡島地方(眞昆布)・日高海岸(三石昆布)・利尻・禮文兩島(利尻昆布)及び厚岸から根室に至る地方(長昆布)などに産し、厚岸・濱中などが昆布取引の中心地となつてをり、その製品はこれまたさかんに、

支那及び南洋方面に輸出されてゐる。

(六)

ここまでで大體、北海道の地理的諸條件が、如何に土地の直接的生産の發生を決定し、如何に生産物の相違性を促す手段となつてゐるかを述べたのであるが、更にこれらの生産物が、社會的分業の自然的基礎となつて、北海道の工業に如何なる影響を與へてゐるかに就いて觀察しなければならぬ。

そこで先づ、北海道東部の工業をみるに、それは野付牛を中心とする薄荷の産出や、帯廣に於けるヴェニヤ板の製作や、或は甜菜栽培地域の河西(三〇%)及び網走(二〇%)に於ける數個の甜菜糖製造會社による良質の精糖の産出などによつて代表せられてゐるのであつて、ここに於ても東部工業が、如何に地方的生産物に依存して起つてゐるかが解るのである。

また西部の工業をみても、北の石狩沖積平野では、澱粉・ビール・乳製品・亞麻製品・

小麦粉・醬油などの農産物による工業と、魚油・硬化油・肥料などの漁獲物による工業とがさかんに行はれ、更に南の森林と炭坑と水力とに恵まれた膽振平野では夕張炭山や支笏湖・洞爺湖の資源によつて製紙・製鐵・製鋼・カーバイト・過磷酸石灰などの化学工業が行はれてゐるのであつて、我々はここに於ても北海道の工業が、その地方的生産物によつてその方向が決定されてゐることを認めることが出来るのである。

これからみても、如何に今日の資本主義社會に於ける經濟文化は、生産の線に沿つて行はれてゐるかが解るのであつて、内地では、どこでも相當盛大に行はれてゐる綿絲紡績とか、織物とか、繭及び生絲とか、陶磁器とか、製茶とかの生産工業が全く北海道に行はれてゐないと云ふことは、その原因の一つを、我々は確かに北海道のもつ固有な氣候や、地理的位置や、その他の自然の中に求むることが出来るのである。

が、兎に角、北海道の自然は、壹億四千三百萬圓の農産物を第一として、壹億壹百萬圓の漁獲物及び水産製造物、五千四百萬圓の礦産物、三千二百萬圓の製紙、二千八百萬圓の林産物、壹千壹百萬圓の煙草、六百五十萬圓の肥料、五百萬圓の澱粉、四百七十萬圓の麻

絲紡績……などを生産するに必要な手段を提供してゐるのであつて、北海道の人々はこれらの生産物を獲得して、この上に獨自主文化を建設するために、活動の要素として多くの都市村落や、鐵道・道路を建設してゐるのである。かくしてこそ、地理的位置に恵まれた北海道の南關としての函館は、海産物市場として榮え、また石炭を積出して貿易額の多い小樽は、農産物・水産物・木材の市場として聞え、更に余市は鯨漁の中心地及びリンゴの産地として立ち、また石炭・洋紙を積出す室蘭は、製鐵製鋼を以て起り、また道廳所在地の札幌は政治・拓殖・學術の中心として、またビール・麻の工業中心地として榮え、更にまた旭川・帯廣・釧路・根室・網走などの各都市は、各自ら自然的環境に應しい地方的産業を以て立つてゐるのである。

(七)

ここで、今迄説明したことを纏めてみると、北海道の地理的諸條件は、北方的な地理的位置と、寒い氣候と、大きな平野と、廣い山地と、長い海岸との五つであつて、この五つ

の地理的諸條件、つまり北海道の自然に依存して、北海道の生産物が規定され、この生産物の上に、更に北海道の工業、或は廣く物質的經濟生活が置かれてゐるのである、と見ることが出来るのである。即ち、北海道文化の自然への依存關係は、生産の線に沿つて、云はば土地の直接的利用による生産物に媒介され、規定されてゐるのである、と云ふことが出来るのである。

それ故に、北海道文化への自然的制約性は、單に氣候や土壤や海流からだけでは、説明することが出来ないであつて、それは現に北海道に居住する二百八十萬の人々の勞働力や、勞働手段や、經濟形態や、乃至は人口密度や、交通状態などの中間項を置いて、これらの因果關係から説明しなければならぬのである。かくする事に依つて始めて我々は、北海道文化への自然的制約性を、科學的に因果的に把握することが出来るのである。

かくしてこそ、暖流・寒流に依る豊かな魚族の棲息場を持つ北海道の海岸と、寒冷的農産物を規定する寒い氣候とが、北海道に於ける支配的な地理的條件であることが是認せられ、この上に、直接には生産物(原料素材)、間接には現存する北海道文化が、依存してゐ

るのである、と云ふことが理解されるのである。

第十一章 樺太地方

樺太地方の地圖をみると、樺太は我國の最北端に位し、従つて我國で最も寒い地方であることが知られるであらう。現に、樺太に存在してゐる文化を構成してゐる地理的諸條件はいろいろあるであらうが、そのうちで、最も重要な支配的な地理的條件は、今述べたこの北方的な地理的位置と、寒い亞寒帶的氣候との二つで、この二つの條件が、直接には樺太の生産性を決定し、間接には樺太の文化に多大な影響を與へてゐるのである。

即ち樺太の北方的な地理的位置は、文化の中心地からの遠隔性と封鎖性との爲に、樺太に對して充分な發展的機能を與へず、反つて樺太文化に對しては逆行的な機能を與へてゐるのであつて、その文化に強烈な制限性を與へてゐるのである。また樺太の北にある寒い氣候は交通に關しては、ガスや、流水や、氷結を以て航海を妨げ、居住に關しては、その

形態に制限を與へ、人口密度を稀薄ならしめ、生産に關しては、大麥・甜菜などの涼冷的農産物や、パルプ原料の基礎としての椴松・蝦夷松・落葉松・白樺などの森林を規定し、更に水産に關しては鮭・鱒・鯡・鱈・貝・昆布などを決定し、以て廣く樺太文化が形成される基礎を與へてゐるのである。

要するに、今日の樺太文化は、北方的な地理的位置と、寒い氣候との二つの地理的條件によつて規定せられてゐる、とみても敢て差支へなからうと思はれる。だから、この位置と、氣候との點から、樺太の人文が如何に制限されてゐるかを述べて見度いと思ふ。

(二)

そこで本論に入る前に、先づ樺太の自然と、樺太の住民とについて、一瞥して置く必要がある。と、いふのは、我々の社會に於ける經濟文化は、自然と住民との交互接觸の中に認められるのであるから、豫めこの兩者の構成を知つて置く必要があると思はれるからである。

そこで先づ、樺太の地勢をみると、樺太では、山脈と平野とが、何れも南北に長くのびて、その南北性を強くあらはしてゐるといふことが樺太の地勢の特長となつてゐる。西側に於ける西樺太山脈と東側に於ける東樺太山脈と鈴谷山脈とは各南北に伸びて、この間に更に南北に走る中央低地帯を介在してゐるのであつて、顯著な南北性を示してゐる。そして山脈には千三百メートル内外の敷香嶽とか、幌登嶽とかがあるだけで、内地にある様な高峰峻嶺は見あたらす、アイヌ土人の本島に對する批評、即ち「所謂平原にして波の起伏するが如き状態の島」と云ふのも、成程と頷かれるのである。これらの山脈を分水嶺として、これから多くの河川が流れて、中央低地帯や海岸平野を養つてゐるのであるが、なかでも中央低地帯の南に於ける、鈴谷川と内淵川とによる鈴谷平野が、樺太の生命であつて、この平野が樺太の生産の要素として、居住の要素として、交通の要素として充分な機能を發揮してゐるのである。豊原を始めとして榮濱・落合・小沼・大泊などは皆この平野によつて養はられ、それは、土地豊饒で農牧に適し、既に良好な部分は開墾されて、所々に農村をも發達せしめてゐるといふ状態である。が、これに對して北の低地帯は、所謂ツンド

ラと稱する景觀で、地表は蘚苔類や小さい落葉松に掩はれた沼澤に富んだ卑濕地で、厚い泥炭が堆積して、内地人の住居は少なく、只オロチョンやギリヤークの土人の良好な放牧地となつて、馴鹿が盛に飼養されてゐるにすぎないのである。

かかる自然に對して、一方住民はどうかといふに、昭和三年末に二十四萬人で、このうち内地人が約二十三萬四千人で、朝鮮人が四千三百人、土人が約二千人、外國人が約三百人と云ふ割合で、内地人が斷然大多數を占めてゐる。内地人は領有當時には、僅に一萬二千人位であつたが、今日ではその二十倍以上に達し、樺太に本籍を有するものは、全體の二〇%内外にすぎないが、他は悉く内地から移住したもので、そのうちでも北海道の二六%が最も多く、これに次いで東北六縣及び新潟縣・富山縣・石川縣等からの移住者が多い。内地人は始めは漁業者として、後には農業者として移住するものが多かつたが、最近ではパルプ工業の急速的進入とともに、工業人口が大いに増加し、また商業に従事する者も、漸次その數を増して、今日では農商工に従事するものが、その大部分を占めてゐるのである。農村は留多加河流域や、西海岸中部以南の沼地に多く、都市は鈴谷平野に多い。

更に朝鮮人は知取町・惠須取町・内路村に多く、これに次いでは大泊・本斗に多く、何れも鐵道工事が農業に従事してゐる。

尙約二千人の土人は、アイヌ・オロッコ・ニクブン・キーンなど、なかでも千五百三十四人のアイヌが一番多く、これに次いでは二百九十八人のオロッコで、百十一人のニクブン、五十人のキーンなどがこれにつづいてゐる。が、サンダーは、既に數年前全く跡を絶つて今は消滅してゐる。數に於て一番多いアイヌは、東は落帆・白濱・檜保・新問・多來加の各部落に、西は多蘭泊・登富津・智來・小藻白・鵜城の各部落に居住して多くは河海に漁り山野に獵つて、自然民族として所謂採集經濟を營んでをつたのである。が、最近はその數が段々減少してゐるので、これが保護のために樺太廳は、彼等を日本家屋に統一し、服装も日本化して、半農半漁の生活を営ましめてゐる。またオロッコは、幌内河畔や多來加から野頃に至る海岸に居住し、冬は山地にあつて馴鹿・貂・獺・狐・熊などをあさり、夏は海岸で、鮭や鱒の漁に従事し、なかには内地人に傭はれて漁場で働くものもある。また百十一人のギリヤーク、即ち今日のニクブンは、幌内の河畔にあつて、馴鹿飼育

に従事し、更にキーンは、稍進んだ文化をもつてゐるが、最も漂泊性に富み、轉々として移動的生活を送つてゐる。

ここまでで、樺太の地勢と住民との一般を述べたのであるが、要するに樺太の地勢は、南北にのびて、この南北性があらゆる文化要素の靜態的及び動態的分布に影響を與へて、人文現象を南北に展開せしめてゐる。即ち、山脈の南北性は、河川・平原の南北性と相俟つて、交通・居住・人口の分布に關してこれらを南北に延展せしめ、しかも氣候的關係から、暖い南の方へ集約經濟を促し、寒い北方へ、より粗放な經濟を許してゐるのである。かかる地勢の南北性と、寒い氣候とが、南へ南へとその人口と、文化とを、集中せしめてゐることは、ひとり樺太だけにみらるる現象ではなくして、スエーデンやノールウェイをはじめとして、廣く北半球に見らるる現象であつて、人間とその經濟文化とが、如何に氣候に制限されて分布するものであるか、といふことを知ることが出来るのである。

さてこれから愈々本論に入るのであるが、先づ第一に、地理的條件としての北方的な地理的位置が、樺太の人文に如何なる制約性を與へてゐるかに就いてみるに、北緯四十六度以北にある樺太の北方的位置は、文化の中心である關東や關西から可なりの距離を置いてゐるがために、これが空間の克服性に對して多大な困難を伴ひ、また西・北・東は沿海州や、西比利亞や、カムチャッカに接し、しかもこれらの地域は、何れも未だ今日開拓されてゐない原始の地域で、只僅かに、南だけが一部ひらけてゐるにすぎないのであつて、全體としてみれば、樺太は現在の所謂テラ・インコグニータにつつまれてゐると云つても敢て過言ではないのである。

要するに樺太に對するかかる空間の封鎖性と遠隔性とは、嚴寒な氣候と共に、樺太の生産性を決定し、その延びんとする文化に非常な制限を與へてゐるのである。つまり樺太の地理的位置は、經濟的缺除要素を多分に負擔せしめられて、本質的に樺太文化の發展性に障害を與へる強い手段となつてゐるのである。それ故に樺太の地理的位置が本質的にもつてゐる空間の封鎖性と遠隔性とは、これが克服に對して必要な何等かの技術的手段が發明

されない限りは、永遠に樺太文化に障害を與へて、これに飛躍的な文化の進展を許さないであらう、と云ふ見解もあながら否定は出來ないのである。

(三)

更に第二の地理的條件としての寒い氣候が、樺太の文化に直接又は間接に如何なる影響を與へてゐるかについてみる。先づこれが農産・森林・水産に與へてゐる生産性について述べることにする。だが、その前に我々は樺太の氣候の状態を知らなければならぬ。

(1)

樺太の氣候は、冬が特に寒く、またその期間の長いのが特長で、恒寒峻嚴で荒涼不毛の僻地である、と云はれてゐるのも、これがためで、同じ緯度にある世界の各地と比較しても、例へば、北緯五十一度三十分にあるロンドンとか、北緯四十八度五十分にある巴里とか、或は北緯五十二度三十分にあるベルリンとかに比べてみても、樺太はこれらより非常

に寒いのであつて、これは全く歐羅巴の如く暖流に恵まれてゐないためと、アジア大陸の影響とによるものである。が、しかし、東と西とは多少氣候をことにして、西海岸は對島暖流に洗はれてゐるので比較的溫暖であるが、東北の海岸は寒流の影響を受けてゐるので、ひどく寒冷であり、また中部は山脈に圍まれてゐるために、大陸的氣候を示して寒暑の差が甚しい。従つて、一般に西海岸は暖かで、眞岡の年平均氣温は攝氏四・一度で、その南の本斗は四・六度を示してゐるが、これより少し南にある亞庭灣の大泊の如きは、返つて寒く三・二度を示してをり、更に東海岸に至つてはこれよりすつと寒く、落合が二・四度、敷香が〇・三度で、敷香よりはすつと北にある安別は、西海岸にあるために、比較的暖かくて一・三度を示してゐる。

また、最も寒い一月には、西南の暖い海岸地方は、零下二〇度内外を示してゐるが、東北の寒い地方では、零下三〇度内外を示し、敷香の如きは零下三四・七度を示してゐる。従つて降雪は早く、十月の中旬か、下旬頃には既に見られ、その積雪量も二・三尺から四・五尺に達するのである。また海水の結氷は、ただ西海岸の眞岡から、南の白土に至る間を除

いては、到るところの近海に行はれ、南の亞庭灣ですら一月中旬には、一面の氷海となるのである。氷上馬橋運搬による氷上荷役の行はれるのは、この時期で、陸と船との間に長い橋の交通機關が發達するのである。また樺太は高緯度にある關係上、夏の六月には午前二時頃既に夜が明けて、午後九時頃には日が暮れる。冬はこれに反して日が短く、午後三時頃には電氣がともると云ふ状態で、夏は殊に日が長く、冬は殊に夜が長いので、これからみると、冬の樺太は、全く夜の國であるといつても差支へない位である。

こう云つた氣象を平均したのが所謂樺太の氣候であつて、かかる特有な樺太の氣候が、樺太の産業や社會状態に、何等かの特種性を與へてゐるのは當然であるので、これらの點について述べることにする。

(2)

先づ、樺太の農業は自ら獨特の趣きをもつてゐて、含水炭素物、即ち砂糖・澱粉・纖維などを出す作物に制限されて、甜菜・亞麻・馬鈴薯・ビール用大麥・パン用小麥・酒精用

ライ麦などに限定されてゐる観がある。しかし、一般に樺太の農業は、今日まだ幼稚であつて、約二萬九千町歩の耕地面積は、四十七萬三千町歩の農耕適地に比較してみると、その割合は僅かに六分にしか當らず、またその農業戸數のごときは約一萬餘、その人口も四萬七千で、これは全戸數に對して僅かに二割にしか當つてゐない状態である。目下、勸農機關として中央試験所を小沼に置いて、農業・畜産・林業及び水産の四部門に對して、特殊な自然要素の下に於ける栽培可能な適作物の査定、及びその耕作法について研究されつつあるし、また民間でも落合町附近と豊原町附近とは、廣い地域に亘る塚越農場が、大農經營によつて着々農牧の實績をあげるやうに努力してゐるので、やがて樺太の農業も將來はだんだんと發達するに至るであらう。が、今日のところ未だそれは小規模で、その農産物の生産額も僅かに四百萬圓程度であつて、これは内地で農産物價格の一番少い山梨縣の五分の一にしか當つてゐない状態である。

(3)

また樺太の牧畜も、氣候風土の關係から樺太が飼料作物に適してゐるので將來有望な産業には相違ないが、今日はまだ幼稚で、牛が四千頭、馬が一萬三千頭、綿羊が百五十頭豚が五千頭、鶏が五萬六千羽にすぎない。が、毛皮用畜としての狐の飼育は、最近益盛で、殊に大正十四年以來からの養狐熱の隆盛は、昭和四年現在の養狐頭數、赤狐・十字狐・黒狐・銀黒狐を通じて九百九十頭を數へしめ、うち銀黒狐がその大部分を占めてゐる。これは飼育もやさしく、また毛皮の價格も高價なので黒貂と共に將來益有望視されてゐる。

(4)

次に林業をみると、勿論、これも氣候的制約の下に存立してゐることは云ふまでもないが、兎に角、樺太の森林は、樺太の生命とするところで、雄大にして鬱蒼たる森林が全島を掩つて、經濟の重大な自然的基礎となつてゐるのである。

樹種は四十九種の喬木と、七十三種の灌木とからなつてゐるが、有用樹種は割合に少なく、僅かに蝦夷松・椴松・グイ松・イチキ・白樺・ドロヤナギ・ハンノキ・タモなどにす

ぎない。このなかでも、ヤナギ・ハンノキ・タモは河岸の低濕地に繁茂し、落葉松は海岸の湖沼に、蝦夷松・榎松の類は、主として山地に密生し、山岳の中腹から白樺を混生して頂上に近づくと白樺になるのである。が、このうち最も多いのは、蝦夷松及び榎松で、これが全森林蓄積の約八割を占めてゐる。そしてこの主要樹種たる蝦夷松・榎松は、建築・パルプ製造・包装用に使用せられ、殊にパルプ製造には樺太の蝦夷松・榎松が本邦パルプ原料木の七割を占めてゐる状態で、これからみても、如何に樺太の森林が、製紙界に關する限りに於てさへも、重要なものであるかがわかるのである。

昭和三年に於けるパルプの生産額は、約二千一百八十萬圓、紙類の額は二千三百三十萬圓であつて、この兩者で四千五百萬圓に達し、これに一千二百十萬圓の林産物價額（總生産額の一三%）を合計すると、木材を原料とする林産工産物の價格は、實に五千七百萬圓餘の巨額に達してゐるのである。この價格は、昭和三年度に於ける樺太總生産物額格九千五百六十八萬圓の六割に相當してゐるので、これからみて、樺太の森林が如何に樺太の生命となつてゐるかがわかるのである。また樺太の同年に於ける總歳入約三千二百萬圓の

うち、森林収入は約一千二百萬圓で三割七分を占め、樺太財源中最も重要なものとなつてゐるのである。かかる關係上樺太に森林管理が行はれてゐるのは當然であつて、林業奨励やその調査や、産物處分などを目的とする林務署が、豊原を始めとして、大泊・留多加・本斗・泊居・元泊・敷香・惠須取・眞岡の九ヶ所に設立されて、營林及び林野の保護取締が盛に行はれてゐるのである。

(5)

次に樺太の水産についてみるに、東海岸には鱒・鮭・昆布・蟹・鰈がとれ、西海岸からは鱒・鱈・鰈がとれ、そして全海岸からは、鯨が漁獲され、この外、鮪・鮫・鯨・イカ・鱈・鯖などが産せられ、また海豹島からは膾膾膾が捕獲されてゐる。が、これらのうち、主なるものは、鯨と鮭と鱒とで、この三者が、樺太の主要漁獲物を構成して、これにその他の漁獲物及びその水産製造物を加へると、全體の水産物總額は、二千萬圓に達し、森林工業に次いで重要な産業になつてゐる。

先づ鯨をみるに、これは一千万圓の生産をあげて、漁獲物中の斷然首位を占め、その漁獲は國境から、北知床岬に至る間と、中知床半島の東岸とを除く外は、何處でも行はれ、今日では西海岸の眞岡・本斗附近や、亞庭灣の大泊・長濱附近や、東海岸中部地方が、最も盛な漁獲場となつてをり、なかでも、ことに大泊支廳管内が、昭和四年に於ては鯨漁の最も多い所となつてゐる。

また鮭は夏にとれる夏鮭（トキシラズ）と、秋にとれる秋鮭（アキアジ）とがあるが、この分布區域は狭く、前者の夏鮭は、東海岸の敷香地方に、後者の秋鮭は西海岸の南部地方及び東海岸の内淵附近で漁獲され、昭和四年の鮭漁獲高三十萬貫のうち、半分の十五萬貫は敷香管内からである。

また鱒の漁獲は、東海岸に多く、亞庭灣がこれに次ぎ、西海岸は餘り振はぬ状態で、東海岸では幌内川を中心とする多來加及び新間間と、内淵川を中心とする元泊及び富内間とに最も多く、昭和四年に於ける三百萬貫の鱒漁獲高のうち、その約半分は敷香廳管内でとれたものであつて、幌内川が鱒の産卵に對して如何に好適の場所となつてゐるかがわかる

のである。そして、その漁獲の大部分は、鹽製品として移出されてゐる。が、一部はまた罐詰の原料にもされてゐる。

その他、鱈・鰈・カニの漁獲や、昆布の採取も盛に行はれてゐるが、特に捕鯨業は、亞庭灣内の札塔を根據地として盛に行はれ、座頭鯨よりは寧ろ長鬚の方が、より多く捕獲せられ、大正十年には僅かに二十頭内外が捕獲せられたのみであつたが、最近では三四十頭が捕獲せられ、昭和四年の如きは三十四頭が捕獲されてゐる。

また鰹魚は、海豹島に棲息して、明治四十四年の日・英・米・露の四國間に鰹魚保護條約が締結されてから後は、段々その頭數も増して、昭和四年に於ける上陸頭數は、約三萬で、産兒數は、一萬三千頭に達し、これが保護並に獵獲に就いては、樺太廳は毎年吏員を出張せしめて、蕃殖上有害と認めらるる行爲は、一切これを禁止し、蕃殖に關係のないものを、毎年約一千五百頭内外撲殺してゐる。この海豹島は、北知床岬から、南十湊にある小さい岩島で、アメリカ領のプリビロフや、露領のコンマンドルスキーと共に、鰹魚の蕃殖場として世界的に有名なものになつてゐるのである。

更に山地によつて規定されてゐる鑛産物をみるに、樺太に於ける主なるものは石炭で、この石炭が將來は主要産業の中心勢力をなす可能性のあるものと見られてゐる。その炭田は非常に多く、僅かに結晶片岩の地域と、古生層の地域とを除けば、全島これ炭田であると云つても敢て過言ではない位で、到るところ豊富で良質な石炭が得られてゐる。今日封鎖炭田として残つてゐる主なるものは、南部炭田と、中央炭田と、北部炭田とで、これらは、競争入札によつて何時でも開封される様になつてゐるが、現在稼行されつつある炭坑は、川上炭坑が最も多く、年額二十萬トンを出し、これに次いでは大平・知取・東白浦・大榮などで、全體では昭和四年に五十四萬トン、價格で約五百萬圓を出してゐる。が、これは本島内のパルプ及び製紙工場や、鐵道・船舶、その他家庭用に使用されて、やつと自給自足をなしてゐるにすぎないのであつて、この點からしても、七億トンの埋藏量を有する樺太の炭田は、その將來を大いに矚目されてゐるわけである。

が、これに對して、石油は各地に露面はあるが、まだ今日は試掘探礦時代で、西海岸では本斗・小能登呂・野田附近に、また中央低地帯では圓山・河南地方に廣大なる油田分布が見られてゐる。

これで地理的位置と氣候と山地とが生産に及ぼす影響についての説明を終つたのであるが、最後に昭和四年度に於ける生産額格からの産業をみるに、パルプ及び紙が四千五百萬圓、水産物が二千萬圓、林産物が一千二百萬圓、鑛産物が六百五十萬圓、農畜産物が五百萬圓程度で、その他を合計すると、樺太の總生産高は、九千五百七十萬圓、即ち約一億圓に達するのであつて、このうち森林によるパルプ・紙・木材の製品と原料品とが、その六割以上を占めてゐるのである。これからみても、樺太の産業が如何に森林に依存してゐるかがわかると同時に、その森林をして、かくも生産經濟の主體たらしめてゐる北方的な位置と、寒い氣候との二つの地理的條件の機能をも充分に理解することが出来るのである。

そこで今迄述べたことを纏めてみると、樺太に於ける多くの地理的條件のうちで、何にが支配的な條件であるかといへば、それは寒い亞寒帶的氣候であつて、この酷寒な氣候は直接には樺太の生産性及び社會性の方向を決定し、間接には樺太文化の方向を規定する手段となつてゐるのである。即ち、寒い氣候は、大麥・甜菜などの寒冷的農産物を決定し、またパルプ・製紙原料である蝦夷松・榎松などの森林を規定し、更に海流と共に、鯨・鮭・鱒などの水産物に關與せしめてゐるのである。かくの如く、樺太の氣候は樺太に居住する人々に對して、生産物の種類や収益性の相違を促し、以て地方的文化が構成される手段となつてゐるのである。

かくしてこそ、その地方地方の自然的環境に應じて、これに相應しい都市例へば野田・泊居・惠須取・落合・知取などの町が、純然たるパルプ工業のために起り、また知根平・名寄・元泊・榮濱・長濱などの町が、純然たる漁村漁港として榮え、またかくしてこそ、

環境に相應しい産業状態、例へば大泊郊外に狐の飼養場が見られ、大泊や、女麗に寒天の製造場があり、北本斗の海濱に棒鱈の廣い乾燥場がつくられ、寒國の情景にオロッコの馴鹿橋や、アイヌの犬橋が見られ、また惠須取川や、名好川に延々たる筏流しがみられ、更に夏には海豹島に膾膾の大群が集り、またここに鷗の一種であるロッペン鳥が、膾膾の分婉する汚物に集つて來ると云ふ状態である。

また、氣候が生産物以外に及ぼす影響についてみるに、一月に於ける大泊の零下十六度の寒さや、敷香の零下二十三度の寒さは云ふまでもないが、全島を掩ふ數ヶ月に亘つての零下十度から二十度の酷寒は、河海を鎖し、湖沼を封じ、流水を以て航行船舶に危険を與へ、また一方、その酷寒は、植物を麻痺せしめ、動物を冬眠させて、剩へ人々の活動を不活潑ならしめてゐるのである。

實に樺太の自然は、慈悲慈愛を以て民衆に臨む樂土ではなく、また花や小鳥を以て迎へる樂園ではないのであつて、樺太に現住する約三十萬の人々は、出來得る限りの文化的武装を以て、自らの自然に對抗して、これが蒙を開くべく運命づけられてゐるのである。そ

れでこそ、現に樺太に居住する人々は、樺太の大自然に、否そのきびしい寒さに翻弄されつつも、力強く徐々に、これが自然の啓蒙運動に突進しつつあるのである。
かくして、住民の移動と共に、教化と技術とが、樺太の原野に與へらるるならば、バルブの國、樺太に於ける文化の光は、燦として彼方、エゾ松・トド松の森から輝くことであらう。

第十一章 朝鮮地方

我々は朝鮮に於て五つの地理的條件を見出すことが出来る。それは、位置と、氣候と、平野と、山地と、海岸とであつて、この五つの地理的條件の上に、朝鮮の生産性がみとめられ、更にその生産性の上に、朝鮮の物質文化が依存してゐるのである。

第一の地理的位置は、我が内地の中國地方と同じ様に、滿洲と内地との間にあつて、コリドー的（廊下的）役目をはたして、間接にこれが朝鮮文化の發達に影響を與へ、また第二の北方の大陸的氣候と南方の内地的气候とは、植物の發生と並に生産物の種類とを決定し、また第三の朝鮮平野は、米・麥・豆・粟・甜菜・人蔘・棉花・煙草などの農産物を確定し、更に第四の山地と丘陵とは、森林・牛・鑛物などの生産に關與し、更に最後の條件である海岸は、鱈・鯨・鯛・鱈・鯨などの漁獲を決定してゐるのである。しかも、これ

らの生産物は、何れも、朝鮮の社會的分業の自然的基礎となつて、各地方地方に異なる産業を興し、特異な文化が展開される手段となつてゐるのである。

かくしてこそ、朝鮮には到るところ特異な産業景觀が、示現されてゐるのであつて、西海岸に於ける群山の港は、朝鮮米の積出で賑ひ、その南の木浦は、棉花の輸出で榮え、北の鴨綠江には筏流しが盛に行はれ、大邱には名高い定期市場が立つてゐると云ふ状態である。また木浦に於ける綿織物工業だとか、平壤に於ける砂糖工業だとか、或は新義州のパルプ工業、永登浦の製革工業、兼二浦の製鐵工業だとかは、いづれも、その地方の生産物によつて規定されて起つた工業、云はば、地方的環境に應じて起つた工業であるとみるこゝが出来るのである。

要するに、朝鮮文化は、それが、たとへ獨立的發展によるものであらうと、或はまた、繼承的發展によるものであらうと、現に展開されてゐる朝鮮文化は、朝鮮の二千一百万の人々と、朝鮮の自然との交互接觸の中にあるのであるから、我々は、朝鮮の人文を、自然的側面と、社會的側面との二方面から見なければならぬのである。即ち我々は朝鮮文化

の繼承及び受容の重要性を觀察しつつ、同時に一方、朝鮮の自然的環境が、文化に及ぼす影響、竝に環境への文化の適應性について、正當に評價しなければならぬのである。かくしてこそ、我々は現存する朝鮮文化が、たしかに、朝鮮の地理的諸條件の総合的本質の中にあることを認むることが出来るのである。

それ故にかかる觀點から、即ち、地理的諸條件が、如何に朝鮮の文化に影響を與へてゐるかと思ふ點から、朝鮮の人文を述べてみたいと思ふのである。

(一)

さて第一の地理的條件としての地理的位置に就いてみるに、元來、朝鮮は大陸の一部として、長く南に延び、三面海にとりかこまれてゐるが、その自然地理的基本關係に至つては、純然たる大陸の一部を構成して、完全なる陸橋をなしてゐる。この南に延びて陸橋をなしてゐると云ふことが、つまり、内地と滿洲との間に於て、朝鮮をして廊下的役目をなさしめてゐるのであつて、朝鮮は、云はば國際的に長い大きな橋である、とみても敢て差

支へないのである。

それ故に、朝鮮の現有する地理的位置が、朝鮮の經濟文化に影響を與へるのは、位置そのものではなくして、我が内地と滿洲・支那との一般的な經濟的繁榮によつて規定されるのであつて、我が内地や滿洲に於ける經濟的活動が、今日に數倍して活潑になつてくればくる程、朝鮮の地理的位置は、これに應じて充分な機能を發揮して、以て朝鮮の經濟文化に影響を及ぼすやうになつてくるのである。つまり、朝鮮の廊下的位置は、朝鮮の經濟文化に發展性を促す單なる動機となつてゐるにすぎないのである。現に、昨年九月に滿洲事變が起つて以來、或はまた本年三月に、滿洲國の建設が行はれて以來は、朝鮮の存在が如何にその存在價值を増し、その廊下的な地理的位置が、如何に重要視され、如何に有利に利用されつつあるかは、既に周知に屬するところであらう。また現に南の釜山にしろ、北の新義州にしろ、或は東北の清津または雄基にしろ、これらの境界都市をみれば、如何にその發展性が、内地や、滿洲の一般社會的繁榮に依存して決定されるものであるか、といふことがわかるのである。

これらのことは、獨り現在に於てばかりでなく、古來からの歴史をみれば、明かなところ、遠く箕子及び衛滿の古朝鮮と呼ばれる時代から、樂浪郡時代や三國時代をはじめとして、南北朝時代、高麗時代、李の時代、更に事大黨及び獨立黨の對立、日清・日露戰爭などを経て、四十三年の日韓併合に至るまで、實に朝鮮は、支那と日本との交互的勢力の影響下に於て、充分に翻弄されたもので、その半島の地理的位置は、日本及び支那兩者の政治的鬭爭圏外には立ち得なかつたのである。遠く三韓征伐や秀吉の朝鮮征伐から、また近くは日清・日露の兩戰役からみても、大陸國支那と群島國日本との間に於て、朝鮮の介在的な位置が如何に多くの事變を惹起する手段となつたかが察知されるのである。

ここに於て我々は、民族的或は國家的に力の弱い國が強國の間に挟まつてゐる時には、その地理的位置が、如何に重大な役目を果すものであるか、と云ふことを、ここ朝鮮に於て深く是認することが出来るのである。丁度それは弱いポーランドが、強い獨逸とロシアとの中間にあつて、この兩國の運命のままに、自由に翻弄されて來たと同じ様なもので、ポーランドが、獨逸とロシアとの間に置かれた「蹴球」であるならば、朝鮮も同じ様に、

長い間、日本と支那との間に置かれた「蹴球」であつたのである。が、日韓併合以來は「蹴球」の役目は「橋梁」の機能に變り、かくて、朝鮮は現に、内地と滿洲國との間に於て、長い陸橋としての機能を充分に發揮しつつあるのであつて、それは、本年三月の滿洲國建立以來の著しい活躍がこれを證明してゐるのである。

(11)

更に第二の地理的條件としての氣候をみるに、北は大陸的氣候を示して寒暑の差が著しく、南は内地に類似する氣候を示して、氣溫も降水量も、内地の状態に似てゐる。北の大陸的な寒い氣候は、一月の平均氣溫をみてもわかるので、北の新義州は零下九・五度(攝氏)で、平壤が零下八・一度、京城が零下四・五度、仁川が三・六度、釜山が二・二度で、南下するほど暖くなつてゐる。それでも全體としてみれば、朝鮮は非常に寒く、南の釜山ですら、殆んど同緯度にある東京よりは、より寒いのである。冬の期間も、北に長く、仁川・平壤・瀧岩浦・城津・中江鎮・雄基などは、何れも五ヶ月餘に亘る長い冬をもち、これに反して

南の濟州・木浦・釜山・全州・大邱などは、比較的長い夏をもつてゐるのである。また降水状態に關しては、朝鮮全體は雨の少ないところで、北の咸鏡北道が一番少く五百ミリ内外、これに對して南鮮の南岸が一番多く千四百ミリ内外で、東京の千五百ミリよりは少ないのである。またその雨の降る時期についても、朝鮮では六・七・八月の三ヶ月に一年間總量の五割から六割までが降るので、勿論この雨に着目して米をつくつてゐるのは云ふまでもないが、この偏頗的に降る雨、云はば、驟雨的豪雨が、不完全なる治水・山林と相俟つて、朝鮮に屢々大洪水を引き起してゐるのである。

これが、朝鮮に於ける大體の氣候であるが、上述のごとく、北が寒く、南が暖かく、その上に雨が少く、降雨の時期が偏してゐると云ふ固有な朝鮮の氣候は、ここに朝鮮の産業經濟の上に多大の影響を與へてゐるのであつて、米が主として暖かい南部に産せられ、棉花及び葉煙草が中部や南部に栽培され、特に人蔘が開城附近に多く、或は養蠶が中部にさかんに行はれ、甜菜が中部に、そして馬鈴薯が北部に栽培され、しかも朝鮮全道に亘つて麥類・豆類・粟が生産されてゐるのである。これらは、みな直接的土地利用の産業に對

する氣候的制約性を物語るもので、如何に朝鮮の産業が、氣候の影響を蒙つてゐるかがわかるのである。

また、雨が六・七・八月の候に、一時に降つて、他の季節に降らないとか、或は空梅雨が起つてくるとか、いふことは、ここに旱魃を引きおこすのであつて、古來から朝鮮の旱魃は、大洪水と共に、畑作や稻に多大の損害を與へることを以て有名になつてゐるのである。大正八年及び十三年の旱魃とか、或は昭和三年・四年の慶尙北道から中部地方にかけての旱魃とかは、何れもこの例で、ここに「治水灌田の術は、施政の要務、王道の由つて基く處なり」と云ふことが生れて來たのであつて、これから大規模な灌漑工事が、行はれる様になつたのである。特に種々な水利組合による大雅里貯水池とか、雲岩貯水池とか、大鰐貯水池とか、餘水吐貯水池とか、延海水利組合貯水池とか、などは何れも有名なもので、水利灌漑の政策が最近によく行はれるやうになつたのである。

要するに、北に寒く、南に暖かく、その上、雨が少なく且つ三寒四温と云ふ特種現象をもつ朝鮮の氣候は、生産物の發生とその種類とを決定して、廣く農産物の生産に關與し、

また交通現象に對しては、北鮮の河水を凍結せしめて、車馬を通ぜしめ、更に居住現象に對しては、朝鮮特有な温突を設備せしめ、また、元山以北の日本海岸には、屢々濃霧をおこして、近海航路の船舶に危害を與へてゐると云ふ状態であつて、我々は朝鮮の固有な氣候が、如何に多角的に多方面に影響を與へてゐるか、といふことを、ここに知ることが出来るのである。

(三)

更に第三の地理的條件としての平野をみるに、これは生産の要素としては、直接的に農産物の生産性を決定する手段となつてゐるのである。

元來、朝鮮の農業は、古來から朝鮮の國本となつてゐるのであつて、農業人口が、全人口の八割を占めてゐると云ふ有様である。従つて農産額は多く、その總価格は、朝鮮に於ける全産業總額拾八億壹千萬圓のうちの七一・一%を占めてをり、これに生絲・製粉・煙草・肥料・綿製品などの農産加工品を加へると、實に農業的生產額は、全産業總額の七五・

九%を占めてゐるのであつて、臺灣と共に朝鮮は、純然たる「農業本位國」であるともみることが出来るのである。

農産物のなかでも太宗をなすものは、云ふまでもなく米で、これは最近、壹千五百萬石を平年作とし、これを日韓併合當時の壹千萬石に比較してみると、五百萬石からの増收になつてゐる。が、その一千五百萬石の收穫は、内地の六千萬石に比すれば、まだ四分の一に過ぎず、一反當りの收量も内地の半分の壹石内外に過ぎないので、米に關する限りに於て、朝鮮では粗放的な耕作が行はれてゐる。これは、全く水利の便がなく、ただ降雨のみによつて水稻の栽培が行はれてゐるためであつて、この水稻の栽培が、實に全水田面積の約四分の三(百二十萬町歩)を占めてゐる状態である。従つて、旱魃の被害は、直ちに廣い範圍に亘つて行はれ、常にその被害は莫大な額に達し、大正五年から十二ヶ年間の年平均水害總額は二千八百萬圓で、このうち農産物の被害は九百萬圓に達し、ことに大正十四年の大水害總額壹億三百萬圓のうち、農産物の被害は二千四百萬圓の巨額に及んでゐる。これがために、總督府は數億の資金を投じて、治水開拓の事業をおこし、以て産米の増殖

計畫に努力し、目下着々その功を奏しつつあるのである。また、耕作上の改良や、收穫物の乾燥調製に對しても周到な注意を加へ、米穀検査を嚴重にした爲めに、優良種米の收穫は、年々増加して、今日では、全收の七八%を占め、一躍朝鮮米の聲價があがり、その輸出額も、昭和三年以來は、年々六・七百萬石に達してゐるのである。

また麥類をみるに、これもその栽培面積は、ほぼ内地と同様であるが、その産額は、壹千萬石内外で、これまた内地の半分にすぎず、そのうち、大麥が七割強、小麥が約二割、裸麥が四分の割合になつてゐる。

その他、大豆は氣候風土の關係から、朝鮮全道に栽培され、北鮮地方からは優良品を出し、全體では四百萬石から五百萬石を産出して、内地の産出高をはるかにしのぎ、そのうち約百五十萬石、價格で二千三百萬圓程度のものが、内地へ移出されてゐる。また約百萬石の小豆と約五百萬石の粟とは、内地の生産より多く、特に粟の如きは、内地の五倍の生産を出し、その他、稗・蕎麥・玉蜀黍・黍・燕麥などは、何れも六七拾萬石の多量な生産をしてゐる。また馬鈴薯は主として中部及び北部に産せられ、これが産額は六十萬トン内

外で、内地よりは稍々少ないが、燕麥と共に、農民の主要食糧作物となつてゐる。

また工藝作物のなかでは、棉花が主なるもので、大正元年以來、アメリカの「陸地棉」の栽培奨励計畫が、南鮮地方に行はれて後は、漸次その産額を増し、かくて陸地棉は、全生産の七割を占むるやうになり、在來種と合し、實棉の産額は十萬トン内外に達し、内地よりははるかに多い。が、これを繰綿に直せば、約三萬トンで、我が消費高の僅かに五分にしかあつてゐないのである。その他、二萬トン餘を以て内地の二倍半の産高を示す大麻、及び約六百トンに以て内地の約十二倍を出す苧麻は、何れも有名である。

要するに、これらの農産物は、朝鮮の固有な氣候と共に、廣い平野によつて、その生産性が、決定されてゐるのであつて、米は中部及び南部の朝鮮に産せられ、棉花は南鮮、特に全羅南道に多く、粟及び燕麥は黃海道以北の朝鮮に多く、そして大豆は全朝鮮に産せられてゐると云ふ有様で、従つてこれらの地方に、農産物の取引市場がおこり、積出港が發達し、特異な農産物風景が開展せられてゐるのである。

(四)

更に第四の地理的條件としての山地及び丘陵が、直接、朝鮮の生産に影響を與へてゐるのは、森林と牧畜と鑛産とに對してであつて、これらの生産物は、地方的産業に分化的職能を與へ、その地方地方に異なる文化が形成される自然的基礎となつてゐるのである。

先づ森林をみるに、朝鮮は林野面積が、全面積の七四%を占めてゐる關係上、用材産出は多くなければならぬ筈であるが、朝鮮の山林は、從來から封山・禁山・陵園墓などの保護林を除いては、所謂公山と稱せられて、悉く庶民の自由な採樵に委せられ、また火田民によつて濫伐せられ、これがために、山林の荒廢は、その極に達したのである。そこで總督府は、明治四十四年に森林令を公布して、植林の奨励、森林の保護及び監督を行ひ、今日では林野面積は、一千六百四拾萬町歩に亘り、そのうち、立木地は六二%を占むるやうになつたのである。主なる森林地は、鴨綠江及び豆滿江の兩流域地方と、脊梁山脈との交通運搬の不便なところに残つてゐる。特に鴨綠江流域内には、立派な森林があつて、中

江鎮・厚昌・江界の營林署管内からは、良材が出されてゐる。木材を切り出すには、内地の和歌山・奈良・岐阜の各縣から出稼人が毎年數百人渡鮮し、伐採場から溪流までは牛曳きで、それから小筏や大筏によつて流送され、豆滿江では二百四十軒下つて會寧であげられ、鴨綠江では八百軒下つて新義州であげられてゐる。従つて新義州に製材所や製紙會社のあるのは云ふまでもない。

而してこれらの森林は、北から南にかけて、氣候に制約されつつ、その種類を異にしてゐる。即ち、北鮮ではタウヒ・朝鮮落葉松・朝鮮針樅・タウシラベ・朝鮮松などが、鬱蒼たる樹林をなし、中鮮から南鮮にかけては、紅松が多く、またクロマツ・ナラ・クヌギ・ケヤキ・ハンノキ・クリも多く、最南部では、カシ・シヒなどの常緑樹及び竹林が多く、これらの七百種に亘る樹林の種類は、北に寒く南に暖かい氣候に支配されつつ、南北に長い朝鮮に分布して、六千五百萬圓の産額を以て、顯著な經濟手段として役立つてゐるのである。

更に山地に於ける鑛産物の情況をみるに、昭和四年には、二千六百五拾萬圓の産額をあ

げ、なかでも鐵の一千萬圓、石炭の六百萬圓、金の約六百萬圓、銀銅の各壹百四拾萬圓などは主なるものである。

鐵鑛は昭和三年のごときは、五十萬トンを超えて、産出の記録をつくつた程で、これは主として兼二浦製鐵所で消費されてゐる。が、また八幡の製鐵所にも送られてゐる。主なる鐵鑛床は、第一が咸鏡北道の茂山、咸鏡南道の利原・端川、忠清北道の忠州、忠清南道の瑞山などの諸郡で、これらは全體で一億トン以上の鑛量をもつてゐるが、その含鐵率は、五〇%以下である。また第二の鐵鑛床は平安南道の价川、黄海道の殷栗・兼二浦・黄州などで、第三は、黄海道の載寧・安岳の鐵山で、この第二第三は七八百萬トンの鑛量をもつてゐる。

また六百萬圓の産額をもつてゐる石炭は、無煙炭と有煙炭とあるが、前者は平安南道、咸鏡南道、江原道に於ける廣い炭田から得られ、後者は、咸鏡北道の豆滿江流域地方と、明川・吉州地方、或は咸鏡南道の咸興炭坑などから得られてゐる。

更にまた朝鮮に於ける牧畜業をみるに、これは可なり盛大なるもので、特に牛は耕作及

び運搬に對して、勞力供給上、一日も缺くべからざるもので、その頭數は、昭和四年に約百六十萬頭で、内地より十萬頭多く、農家にとつては理想的な役牛となつてゐる。これに對して、馬は五萬六千頭で、それは秋田縣一縣にも及ばないが、然し、豚は百三十萬頭を以て内地の約二倍を飼育して、牛と共に全道に廣く分布してゐる。朝鮮の牧畜業は天恵に浴してをり、その上農業とは、不離不可分の關係にあるので、將來、その施設の宜しきを得れば、これが發達は期して待つべきものがあらう。

(五)

更に最後の地理的條件としての海岸をみるに、これは延長一萬七千六百軒を以て、海流と共に、朝鮮に水産業發達の可能性を與へてゐるのである。

いま東海岸と西海岸との漁獲をみるに、この兩岸は水理狀況を異にするので、これが漁獲物にも影響を與へて、東海岸と西海岸とはその漁獲物に相違がある。即ち、東海岸の暖寒二流の合するところでは、季節によつて異なるが、春夏は、暖流が可なり北まで行くの

で、鱈・鱚・鱈・鰺・鯛などがとれ、秋冬は寒流の勢力が強くなるので、明太魚・鰯・鱈などがとれ、これに對して一方、潮汐の干満の差九米を有し、且つ屈曲にとんでゐる西海岸は、これまた水理關係に支配されて、干潟地には、淺蜆・蛤・シロフキなどの貝類が多く、淺海には鰕類が著しく、またコチ・ニベ・タチウヲ・マナガツヲなどの魚類がとれ、更に暖流の多大な影響を蒙つてゐる南海岸では、鯖・鱈・鱚・鯛・アナゴ・タチウヲ・マナガツヲ・鱈などが漁獲されてゐるのである。

朝鮮に於て、水産が、如何にさかんであるかは、百萬圓以上の漁獲物が十一種にも達してゐることからみてもわかるのであつて、今それを漁獲物の額格順からみると、鰻が一千五百萬圓（昭和四年）で第一位、これに次いで、鯖・鰯・鱈・鱚・鯛・鰺・鰈・鰩の順で、その他を加へると、漁獲物は全體で、六千五百四十萬圓に達し、これに四千四百八十萬圓の水産製造物を合計すると、實にこの兩者で、一億圓餘の巨額に達してゐるのであつて、これをみても朝鮮の水産業が如何にさかんであるかが知られる。

ここまでで大體、朝鮮に於ける五つの地理的條件と、土地の直接的利用による生産物との關係を明かにしたのである。即ち、朝鮮の自然と、朝鮮に居住する二千一百万の人々との交互接觸のなかに、約十三億九千萬圓の農産物と、一億圓の水産物と、六千五百万圓の林産物と、二千七百万圓の鑛産物などの原料素材の獲得があり、人々は、これらの自然的原料を、自然界から引き出すために、平原や海岸に多くの都市村落及び鐵道交通網をつつて活動してゐるのである。

かくしてこそ、政治教育の中心地としての京城を始めとして、南鮮の門戸としての釜山や、定期市場で名高い大邱や、棉花の積出港としての木浦や、米・人蔘・牛皮を輸出する仁川や、農事改良の中心地として有名な水原や、或は人蔘の産を以て知らるる開城や、米や大豆を集散する沙里院や、風光の勝れた平壤や、木材・パルプの都である新義州や、裏朝鮮第一の開港としての元山や、さては東北地方の門戸または要地としての清津・雄基・羅南・會寧などの多くの都市が發達し、また、かくしてこそ、京釜・京義の二大幹線が、半島を縦貫し、これに咸鏡線・京元線・湖南線などの支線や、平安北道の森林鐵道などが培養的に建設され、以て直接的には原料素材の獲得に對し、間接的には朝鮮文化の發展に對して貢獻してゐるのである。

そこで今まで説明したことをまとめてみるに、朝鮮の地理的諸條件は都合五つあつて、その各の個別條件は、その全關性の中に於て、各特異な機能を發揮してゐるのである。即ち、その地理的位置は、滿洲國と内地との間にあつて、陸橋としての役目を果たし、次の大陸的氣候は、動植物の發生・成長・種類に關與し、平野は氣候と共に、農産物の生産を決定し、また山地・丘陵は、用材・鑛産・牧畜の生産に關係し、最後の海岸は、海流と共に、水産物を決定してゐるのである。

しかしてこのうち、何が、支配的な地理的條件であるか、といへば、それは朝鮮の平野

であつて、平野が、斷然顯著な機能を示現してゐる。即ち、平野は朝鮮に於ける全産業總額十八億壹千萬圓のうち、その七割六分、額格で十四億圓に達する農業的生産物（農産加工品をふくむ）を決定し、また全住民のうち、その八割をして農民たらしめてゐるのであつて、云はば、朝鮮の人々の生活は、これを土地の直接的利用即ち廣義の農業・漁業の上に置かしてゐるのである。

これはひとり、朝鮮ばかりではなく、文化の進展してゐない殖民地や、殖民地的地方には共通なことで、臺灣が熱帶的農産物により、北海道が寒冷的農産物及び水産物により、更に樺太が森林パルプによつて、その經濟文化が支持されてゐると同様で、全く朝鮮は農業によつてその經濟が維持されてゐるのである。勿論、今日の朝鮮は鐵鑛や石炭を採掘して、これを使用してはゐるが、まだ固有な大工業は發達してをらず、その上、農業經營は粗放的で、人口は稀薄で、しかも可動的であると云ふ状態である。

が、兎に角、八割の農民からなる二千壹百萬の朝鮮の人々は、朝鮮の全産業總額、十八億圓の産業を、如何に維持し、如何に發展せしむべきか、について日夜考慮しつつ、強く

朝鮮の自然界に働きかけ、以てこれから原料を引出してゐるのである。云はば、朝鮮の自然は、朝鮮の人々に衣食住に對する素材獲得に關して、自由な選擇をなさしめ、以て文化が形成される手段を與へてゐるのである。それ故にこそ、朝鮮の地方地方には、その地方の環境にふさはしい特異な産業や、風俗習慣や、文化が展開されてゐるのである。

かくしてこそ、廣い朝鮮平野に良質な朝鮮米が耕作され、高麗の首都開城に、不老長壽の藥としての人蔘が栽培され、比較的長い冬の寒さに、朝鮮固有な温突が設備され、また偏頗的な降雨と濫伐とに、朝鮮の禿山があり、北鮮の酷寒な山岳地方に、あはれな火田民の漂泊の旅が見られ、いたるところの街頭風景に、朝鮮の飴賣姿が見られ、若い妓生に朝鮮特有な音曲と舞踊とがみられ、また牛の憩ふ小川風景に、三々五々朝鮮女の洗濯姿があり、また古來からの風習に、長い煙管を銜へた白衣の冠姿があり、さては深山に有名な朝鮮の虎があり、北鮮の鴨綠江に、情調纏綿たる鴨綠江節が聞かれると云ふ状態であつて、要するに、これらの朝鮮米・人蔘・温突・禿山・火田民・朝鮮飴・朝鮮の虎・白衣の冠姿・妓生・鴨綠江の筏流しなどによつて代表される朝鮮文化は、つまるところ、上述の五つの

地理的條件、即ち朝鮮の自然と、朝鮮の人々との交互接觸の中に、その存在性をもつてゐるものである、とみることが出来るのである。

などの飼育を可能ならしめ、剩へ鐵・石炭・マグネサイト・金鑛などを採掘せしめ、更に第四の廣い山地は、吉林・黑龍江省の一帯に有用材を出さしむる可能性を與へてゐるのであつて、これらの地理的諸條件は、かかる生産物を媒介として、滿蒙四大資源即ち「農・牧・林・鑛」業の發達の可能性を與へ、以て獨特な滿洲文化が形成される手段を提供してゐるのである。

かくしてこそ、滿洲には滿洲獨自な原料素材供給と云ふ生産現象が生じて、大連や到るところに、大豆や豆粕の山なす蓄積が見られ、興安嶺の山麓には、牛の放牧が行はれ、撫順からは露天掘による石炭が採掘されてゐると云ふ有様で、これらはその地方地方に特異な工業なり、文化なりを、展開せしむる手段となつてゐるのである。

要するに滿洲國の文化、云はば滿洲國の人々の生活は、全く土地の直接的利用、即ち廣義の農業の上に置かれてをり、しかも、その農業經營は粗放的で、その上人口は稀薄で、しかも可動的であり、田舎の聚落はあるにはあるが、大都市と名付くべきものは少なく、その上、土匪や馬賊の横行によつて、生命、財産の不安がある……と云つたやうなもの

上に置かれた満洲文化は、要するに我國に二倍する満洲の大自然と、三千二百萬の人々との交互接觸の中に存在してゐるのであつて、それは、云はば、高粱に明けて高粱に暮れる満洲の大平原の本質のうちにあると見ることが出来るのである。

本章は、前置と緒論とのために、大分紙面をとつたが、これから地理的諸條件の觀點から、満洲の人文地理について述べて見度いと思ふ。

(11)

先づ第一の地理的位置について觀察してみるに、これが位置の機能は、満洲國に二つの性質、即ち緩衝國的性質と、複族國的性質とを與へ、以て満洲國に他の獨立國とは異なる性質を與へてゐるのである。

先づその緩衝國的な性質は、満洲がプロレタリア獨裁のゾヴェート・ロシアと、民主政體の中華民國と、そして立憲君主の日本との三ヶ國の間に介在してゐることによつて、必然的にあたへられたものであつて、三ヶ國の摩擦面を緩かにする作用をなすものである。

亞細亞に於ては、かかる緩衝國の例は少いが、民族分布の複雑した歐羅巴には非常に多いのであつて、白耳義・ルクゼンブルグ・スイスなどは、この例で、これらは、獨逸とフランスとの間に於て、所謂歐羅巴西部緩衝地帯を形成してをり、またこれに對して、エストニア・ラトヴィア・リツアニア・ポーランドなどの緩衝國は、獨逸とロシアとの間に於て所謂歐羅巴東部緩衝地帯を形成して、各相互間に於ける鬭争の危険性を減少せしめる役目を果してゐるのである。これと同じやうに、満洲國もロシア・支那・日本の間に於て、緩衝的役目を果すべき使命を、獨立國家それ自體の中に保藏してゐるのである。

また一方、地理的位置は、満洲國に複族國的性質を與へ、内地人・朝鮮人・滿洲人・漢人・蒙古人・ロシア人などの各民族を以て國家構成に必要な「滿洲國人」たらしめてゐるのであつて、多くの民族による所謂複族國を作りあげてゐるのである。それは丁度、獨逸人・佛蘭西人・伊太利人からなるスイス國と同じやうに、また、チェック人・スロヴァーク人・獨逸人・マジヤール人・ルテーネン人・ユダヤ人・ポー人などからなるチッコ・スロヴァキア國と同じやうに、完全に多くの民族の混合國を形成してゐるのであつて、從

つてこれが政治外交は、一民族からなる單族國よりは、非常に複雑で、ここに、より困難な所謂複族國外交なるものが、生じてくるのである。現に、滿洲國の外交が、非常な難局にある一つの原因は、滿洲國が多くの民族の上に、その基礎を置いてゐるところにあるのである。

要するに、滿洲國の地理的位置は、緩衝國的性質と、複族國的性質とを與へ、しかも前者は日・支・露間に起り得る軋轢に對して、緩和的な役目を果し、後者は複雑した特異な複族國外交を生ぜしむる可能性を與へてゐるのである。

勿論ここに、滿洲國が緩衝國であり、複族國であると云ふのは、ポーランドが、フランスの勢力範圍のもとに於て、緩衝國であり、複族國であると云ふよりは、より以上に、密接に、強く、日本の勢力範圍のもとに於てであることは云ふまでもないのである。

(三)

更に第二の地理的條件としての氣候についてみるに、滿洲の氣候は、純然たる大陸的氣

候を呈して、農作物の栽培に著しい影響を與へてゐる。

先づ、その氣候の状態をみるに、夏の六・七・八・九の四ヶ月間は、非常に暑く、これに對して冬の期間は、非常に寒く、例へば、これを殆ど同じ緯度にある新京（北緯四三度五五分）と、札幌（北緯四三度四四分）とについてみるに、一月の平均氣溫は、新京が零下七・二度（攝氏）であるに對して、札幌は零下六・四度で、ずっと暖かく、また最も暑い七月の平均氣溫をみても、新京が二三・四度であるに對して、札幌は、一九度で、ずっと溫度が低くなつてゐる。また、ずっと南の、これも殆ど同じ緯度にある大連（北緯三八度五四分）と、山形（北緯三八度一五分）とを比較してみても、一月の平均氣溫は、大連が、零下五度で、山形が、零下六度、また八月の平均氣溫は、大連が二四・六度で、山形が二三・九度を示してゐるので、これからみても、滿洲は全體として、冬寒く夏に暑い、大陸的な氣候を示してゐることがわかるのである。特に新京以北は、寒暑の差が著しく、盛夏は攝氏三九度に達し、冬は零下三〇度に下ることが、珍しくないと云ふ状態である。

従つて、これが農作物に影響を與へてゐることは當然で、新京以北の寒い所では、農作物も著しく限定されて、麥類・大豆・高粱・亞麻・粟・甜菜などの生長期間の短いものが栽培され、これに反して、南滿の南方では、夏に於ける農作物の生長期間も長く、大豆・高粱・玉蜀黍以外に、果樹・棉花・蔬菜などが廣く栽培されてゐるのである。

またその降水量を見ると、滿洲は非常に雨の少ないところで、一年に五百ミリから、七百ミリの間で、これは日本内地の三分の一に過ぎず、世界の他の地方に比較して亞乾燥地帯をつくつてゐるのである。勿論、滿洲内でも所によつて、雨の多い所と少ない所のあるのは云ふまでもなく、南から東北地方に掛けて雨が多く、西北部、蒙古地方に至つては非常に少くなつてゐる。

全般的に見て、降水量が少く、その上、日照時が多く、従つて自然蒸發量も多く、冬に寒く、夏に暑い、と云ふ滿洲固有な氣候は、ひろく農作物の種類を決定し、滿洲に於ける農法をして、日本のそれとは全然趣きを異にする一種の乾燥地農法を經營せしめてゐるのである。

(四)

更に第三の地理的條件としての滿洲の平野をみるに、これは氣候と共に、廣く農業・牧畜・鑛業を起さしむる可能性を與へ、また都市村落及び交通機關の發達に關與してゐるのである。

(1)

先づ滿洲の農業についてみるに、その耕地は、奉天省が最も多く、可耕地面積に對する既墾地面積の歩合は、奉天省が六八・九七%で、これに次いで、熱河省が六二・一一%、吉林省が六〇・〇六%、黑龍江省が四二・一六%で、滿蒙全體では、五五・九三%の割合になつてゐる。が、この既墾地面積を、全面積に比較してみると、その割合は僅かに二二%で、まだ發展の餘地は充分あるのである。

これらの耕地から生産さるる農産物は、その種類が五十種から六十種もあるが、その主

なるものは、大豆・高粱・粟・玉蜀黍・小麥・大麥・燕麥・黍・蕎麥・稗・水稻・陸稻など、この外に、特有作物としては、大麻・青麻・亞麻・蓖麻・荏・煙草・棉花・甜菜などがあり、穀物のうちでは、大豆・高粱・粟・玉蜀黍・小麥を、滿洲の五大農産物と稱して、これらの年平均生産額は、大豆が第一位で、三千七百萬石、高粱が三千六百萬石、粟が二千七百萬石、玉蜀黍が一千三百萬石、小麥が九百萬石で、五大農産物全體の産額は、一億二千萬石の巨額に達し、尙これに、その他の雜穀、及び米を加へると、主要な穀類農産物は、一億四千萬石の巨額に達するのである。このうち、一億石は滿洲で消費されるが、残りの四千萬石は、輸移出されてゐる。

(262)

今その主なるもの二三についてみるに、豆粕及び豆油にする大豆は、主として遼河・松花江流域の平原に産せられ、また鴨綠江、その他の河川流域にも産せられてゐる。大豆栽培の北方限界は、北緯四十八度で、東山地方、新京を中心とする地方、ハルピンを中心とする地方が、大豆の三大穀倉となつてゐる。従つて、これらの原産地に於て、交通の便利な所が、大豆の集散地となつてゐることは云ふまでもなく、新京・開原を始めとして、公

主嶺・四平街・范家屯・郭家店・鐵嶺・奉天・遼陽、その他、哈爾濱・新民・巨流河・錦州・吉林・鄭家屯・洮南・海龍などがその主なるところで、また港では、營口・安東・大連が、主なる大豆の集散地となつてゐる。年額三千七百萬石に達する滿洲の大豆は、實に世界生産の六割以上を占めてをり、そのうち一千六百萬石は、滿洲の油坊で製油原料にされ、一千三百萬石は大豆のまま輸出され、残りの五六百萬石が、僅かに地方農家の食糧に供給されてゐる状態である。實に滿洲の大豆は、世界的商品となつて、滿洲に於ける輸出品の首位を占めてをり、これが取引・輸送・製造に關しては、全く滿洲獨特な景觀が、都市や、金融や、交通などに展開されて、宛然、滿洲は、大豆の國であるかの如き觀を呈してゐるのである。

(263)

次の高粱は、大豆と共に、滿蒙特産物の一であるが、これは三千六百萬石のうち、その大部分は、地方産地に於ける農民の主要食料品、及び家畜の飼料に供せられてゐるので、輸出品としては、それ程重要ではない。その栽培は、遼東灣の灣頭から、東北の方向をとつて、小興安嶺の麓に到るまで行はれて、成熟する初夏の候になると、あの廣漠限りなき

滿洲の原野は、全く黄褐色の高梁の海と化するのである。そしてこれらの生産地に近く、高粱の集散地、例へば、遼陽・奉天・鐵嶺・開原・四平街・公主嶺・新京・鄭家屯、通遼チチハルなどが、高粱の取引を以て活躍するのである。

その他、滿洲農民の重要な食料品である粟や、氣候の關係から南滿洲を主産地とする玉蜀黍（通稱・包米）や、また氣候地味の關係から、南滿よりは北滿に適する小麥や、さては北緯四十五度以南の間島・新京・撫順・營口・鄭家屯地方に耕作さるる米や、或は氣候的關係から遼陽・海城・義州・錦州などの南滿洲の南部に産せらるる棉花など、これらはみな、今日まだ充分に生産されてゐないが、その經營の宜しきを得るならば、その將來は大いに囑望されうるのである。

要するに、滿洲に於ける農業は、粗放的で、内地の如く、ただ人力に依つてのみ行はれてゐる集約的な園耕の形態とは違つて、馬やトラックを、人力の代用として用ふる農耕の形態が、行はれてゐるのである。今日、滿洲の大部分は、まだ豊沃な處女地で、これに科學の力と、交通の設備とを以て、大資本と大勞働力とが加へらるるならば、滿洲の大平野

は、東洋、否世界に於ける食糧原料の一大供給地となる可能性は、充分認めらるるのである。それは一日も早く開拓されなければならないのである。

(2)

更に平野に關係する牧畜についてみるに、各家畜の頭數は年々増加して、最近では豚が一番多くて、八百五十萬頭、これに次いで緬羊が三百五十萬頭、牛が三百十萬頭、馬が三百萬頭、山羊が百二十萬頭、騾が八十萬頭、驢が五十七萬頭、駱駝が一萬頭で、その他、家禽が二千五百萬羽の推定概算になつてゐる。そしてこれらの牛・馬・緬羊・山羊は、主として農耕地及び草原地に飼育されて、特に牛馬は農耕の形態とは不可分の關係にあるので、人力の代りに大いに使用せられてをり、この點は、内地の農業組織とは大いに異なつてゐる。元來、この農耕なるものは、バビロニアから發祥して、廣く全世界に分布したものであるが、その目的とするところは、栽培植物を個別的に注意深く植ゑるよりは、むしろ出來るだけ大規模に行ひ、出來るだけ人力を用ひずして、畜力を用ふるのを目的としてゐ

るのである。従つて家畜の飼育は、この農耕形態には必然的に附随するもので、家畜は、ひとり農耕に使役せらるるばかりでなく、運搬・脱穀・調製など、その他、利用され得るところには悉く利用されてゐるのである。牧畜が副業的であるにもせよ、滿洲に於てはこれが盛大に行はれてゐるので、ここに内經濟及びミルク經濟が行はれてゐるのは、また當然であつて、我々内地の人々が牛の少ない關係上、動物の肉を魚類によつて補つてゐると同じやうに、滿洲の人々は滿洲に魚が少ないので、動物の肉を牛や豚によつて補つてゐるのである。が、現在に於ける滿洲の牧畜の状態は、まだ大いに進歩する餘地があるので、科學的に原始的放牧地が開發さるるならば、滿洲の原野が、將來大いに、有望な放牧地帯となることは當然であると云はれてゐるのである。

(266)

(3)

更に滿洲に於ける鑛產資源について見るに、これは今日まだ搖籃時代であつて、如何なる種類の鑛物が、どうゆう状態で產出されてゐるか、と云ふ大略の見當が、やつと付いた位である。

昭和五年に於ける鑛產物の產額を見ると、石炭が、一千萬トン、鐵鑛が八十三萬トン、含油頁岩が九十八萬トン、石灰岩が六十九萬トンで、その他、苦灰石・耐火粘土・菱苦土鑛・滑石・硅石・硫化鐵鑛・方解石・銅鑛・滿俺鑛・長石・石綿・金なども相當な產額があげられてゐる。そのうちでも主なるものは、鐵及び石炭で、鐵は鞍山・廟兒溝・弓張嶺などから得られ、これらの産地に於ける鐵鑛と其他の地方に於ける鐵鑛とを合計すれば、これが埋藏量は十五億トンと推定されてゐる。また石炭は本溪湖・煙臺・撫順から盛に採掘されて、昭和二年調の埋藏量は約三十億トンと云はれてゐる。

(267)

(五)

更に第四の地理的條件としての廣い山地をみるに、これは全面積の三分の一を占めて大森林地帯を決定し、以て廣く有用材の供給に關與してゐるのである。

奉天省には、森林は僅かに全面積の一割しかないが、吉林・黑龍江の兩省には、何れも

四割の面積を占むるものがあり、松花江流域地方や、大興安嶺や、小興安嶺には、到るところ朝鮮松・朝鮮樅・タウシラベ・蝦夷松・カラマツなどが産せられてゐる。そして鴨綠江上流から出る所謂鴨綠江材は、安東及び新義州で集散され、この兩市は、毎年六月から九月に至る間は、木材の山で蔽はれてをり、また吉林材は吉林に集り、北滿材はハルビンに集つて、これらは全體で三百五十萬石から五百五十萬石と推定され、安東・吉林・新京・ハルビン・大連などで製材され、廣く建築・土木・マッチ・製紙原料に供せられ、日本及び支那に輸出されてゐる。

(六)

ここまでで大體、滿洲の地理的諸條件と、これが直接的生産物との關係について述べたのであるが、滿洲に居住する三千二百萬の人々は、要するに、これらの生産物を滿洲の大自然から獲得する爲めに、あらゆる知識と技術とを以て、自然の寶庫を開きつつあるのであつて、これが労働手段として、人々は鐵道を敷設し、運河をつくり、都市村落をたてて

ゐるのである、とみることが出来るのである。と、いふのは、我々の資本主義社會に於ては、經濟文化の内容は、常に生産の線に沿つて行はれてゐるからである。だからこそ、建設された都市は、その地方地方の生産物によつて、その色彩が決定されてゐるのであつて、撫順は石炭を以て純然たる鑛業都市としての色彩を示し、安東は木材の集散地として、また國境都市として立ち、大連は滿洲國の南の關門として、貿易港として、或は工業都市として榮え、貔子窩・普蘭店は製鹽を以て聞え、奉天は奉天城を以て商業交通の中心地となり、更に新京は滿洲國の首府として、或は大豆・豆油・高粱の集散地として榮え、更に吉林は煙草・木材を以て立ち、ハルビンは國際的都市として或は北滿の金融市場の中心地として、またチチハルは穀類・家畜・毛皮の取引市場として發展してゐると云ふ状態で、多くの都市村落は、その地方地方の環境に應じて、これにふさはしい特有な色彩を以て立つてゐるのである。かくしてこそ、獨自な文化なり、風俗習慣なりが、その地方地方に展開されて、これが全體として、滿蒙文化といふものを構成してゐるのである。

そこで今まで説明したことをまとめてみるに、滿洲に於ける地理的條件は、位置と、氣候と、平野と、山地との四つであるが、このうち、支配的な條件となつてゐるものは、何と云つても、廣茫限りなき平野であつて、滿洲に於ける一切のものは、即ち政治・經濟・交通・軍事に關する一切のものは、無限の水平線をもつた大きな平原の本質の中に存在してゐる、と見ることが出来るのである。

滿洲に於ける全生産額のうち、その九四%までが、農産物によつて占められてゐることから見ても、滿洲の平野が生産に關する限りに於てさへ、如何に重大な役割を演じてゐるかが理解されるし、その他、鐵道の敷設に關し、家畜の飼育に關し、都市の建設に關し、また、棉花や甜菜や小麥の栽培に關して、廣い滿蒙の平野が、如何に強い決定權を握つてゐるか、と云ふことが是認されるのである。

現に滿蒙の大平原は、あらゆる人文現象に、強い影響を與へてゐるのであつて、例へば

滿鐵線に四呎八吋半の標準軌を許し、東支線に五呎の廣軌を許してゐることや、大規模な農法に、馬やトラックを使用してゐることや、興安嶺のスロープに、數千の羊を追ふ神々しい羊追ひの姿が見られることや、土壁をめぐらす支那式民家のまわり、柳樹の下に、豚のさまよふ有様や、或は平野に昇つて平野に入る赫々たる太陽の美しき眺めや、古風な骨董味ゆたかなカマボコ馬車が原始の道路に曳かれて行く光景や、さては支那人の鈍大性にして慘忍性に富んだ性質や、土匪馬賊の横行が盛に行はれてゐることや、また我國が經濟的生命線を滿蒙に延長してゐる理由など、これら一切のものは、みな廣茫限りなき滿蒙の大平原の本質の中に、その發生の萌芽をもつてゐるのである。

そして、まだ今日では、樺太の少數の人々が、樺太の寒い自然に翻弄されてゐると同じやうに、僅か三千二百萬の滿洲の人々は、茫々限りなき廣大な滿洲の大平原にもてあそばされてゐる傾向がないでもないのであつて、蒙古や、北滿の神秘的な、豊かな大自然は、現に襟を正して、その寶庫の扉を固く閉ざしてゐるのである。それ故に、目下の急務は多くの移民を送ることであつて、科學と技術との力を以て、多くの勞働力が、滿蒙の大平原に

加へらるるならば、滿蒙の自然は自ら沸騰し、自ら煙をあげて、全體系の調和へと急いでくるのである。

かくしてこそ、始めて大平原を克服する滿蒙固有な、偉大な文化の光が、黄金なす高粱の彼方から、力強く、徐々に輝いてくるであらう。

第十四章 總論 (上)

こゝまでで、大體、十三章に亘つて、我國の各地方に於ける人文地理の概略に就いて、説述したので、これで簡單ながら、地理的諸條件から見た各論を終ることにする。それで、本章と次章とを以て、日本地理の總論とする。

本章に於ては、これまで論述して來た我國の各地方に於ける支配的な地理的條件と、特異な人文現象とが、如何に關係してゐるかを、個別的に取扱つて見たいと思ふ。

例へば、關東地方は、關東平野と大東京市の存立とが生命であり、近畿地方は、阪神工業地帯と、京都・奈良・伊勢の聖地とが特長であり、中國地方は、全面的な丘陵性と牛の飼育とが特色であり、更に臺灣地方は、熱帶的氣候と熱帶的農産物とが顯著であり、また北海道は、水産物と涼冷的農産物とが著しく、更に樺太は酷寒な氣候と森林パルプとがそ

の特長である、といったやうなことに、一括して略述してみたいと思ふ。

そして次に(十五章)日本全體の構成に關與する地理的諸條件——即ち、日本の地理的位置と、熱帯から溫帯・亞寒帯に至る氣候と、全面的に分布する山脈と、部分的に分布する平野と、そして比較的屈曲に富む海岸線との五つの地理的諸條件を述べ、これらが、直接的生産、即ち廣義の農業及び漁業に、如何なる影響を與へてゐるかについて述べ、最後に前者の地方的な特異現象が、後者の總體的現象の中に於て、如何なる關係に於て存立してゐるか、また如何なる分前を以て、活躍してゐるか、について述べて見たいと思ふ。

そこで、前章までの各論の説明に際しては、中學校の地理教科書に従つて、關東地方から、東北・中部・近畿地方と、順序を追つて説明したが、ここでは便宜上、最北の樺太から始めて、順次南下して、各地方の特異な現象について、個別的にまとめてみたいと思ふ。

(一)

そこで、先づ、樺太について説明しなければならぬが、一體、樺太に於ける地理的特

長は何であるか、と問はれたならば、一言以てどふ答へたらいいであらうか。その答としては、支配的な地理的條件に對しては、寒い氣候と北方的な位置とを以てし、特異的な文化に對しては、廣義の森林業を以てすれば、充分であると思ふ。即ち、寒い氣候と、文化の中心地からはなれた北方的な位置と、森林によるパルプ業との三つが、樺太に於ける生命であつて、この三者の上に、現存する樺太文化が依存してゐる、つまりこの三者を中心として、樺太文化が各方面に展開されてゐる、とみることが出来るのである。

換言すれば、零下三〇度に下る冬の酷寒な氣候は樺太に居住する人々の生活を抑壓し、人間的活動を減殺せしめ、人々に文化的武裝を以て自然に對抗すべく運命づけ、更に樺太の北方的な地理的位置は、文化の中心地からの遠隔性と封鎖性とを以て、樺太文化の發展性を妨げてゐるのである。そして、ただ蝦夷松・椴松によるパルプ文化が、不利な樺太の自然的條件を克服しつつ、漸次發展して、代表的な樺太文化の基調となつてをり、樺太の行政・經濟・交通に關する一切のものは、直接間接みなこのパルプ文化の中に織りこまれてゐるのである。

寒い氣候と、北方的な位置と、そして、この上に置かれたバルブ工業の文化、この三者が樺太の特長となつてゐるのである。

下つて、北海道の地理的特異性は何か、といへば、支配的な地理的條件は、暖流・寒流によつて、豊かな魚族の棲息場をもつてゐる海岸と、比較的寒い氣候との二つである、と云ひ得るのであつて、前者は、一億圓の漁獲物及び水産製造物を以て、北海道をして我が國第一位の「水産國」たらしめ、後者の寒い氣候は、一億四千萬圓を以て、麥類・豆類・馬鈴薯などの涼冷的農産物を決定してゐる。また、廣い山地及びその裾野は、牧畜を盛ならしめ、二十七萬頭を以て、我國第一位の馬の飼育を可能ならしめてゐる。

それ故に、北海道の自然と、北海道の人々との交互接觸の中から生れたところの鯨・鱈・鱒などの水産物と、涼冷的農産物と、並に馬との三つが、北海道に於ける代表的な社會的分業の自然的基礎であつて、云はば北海道の文化は、この三者に依存して、この上に展開されてゐるものである、と見ることが出来るのである。

更に、東北地方に轉じて、東北地方に於ける地理的特長を見るに、支配的な地理的條件は、本州の北に於て占めてゐる北方的な位置で、これが、東北地方の文化を規定する指導的な要素となつてゐる。

即ち、その北方的な位置は、街村の分布状態から見てもわかるやうに、東北のあらゆる文化に、半殖民地的色彩を與へ、氣候と共に、青森縣にリンゴを栽培せしめ、岩手縣に馬を飼育せしめ、山形縣・福島縣に櫻桃の産出を可能ならしめ、山形縣・秋田縣の河川平野に、米の耕作をさかんならしめ、福島縣・山形縣に養蠶を盛ならしめてゐるのである。

換言すれば、東北地方の文化は、北方的な地理的位置を基本的條件として、リンゴや、櫻桃や、米や、繭などの上に基礎を置いてゐるものである、と見る事が出来るのである。

以上、略述した樺太と、北海道と、東北地方とは、しかしながら、ここに、二つの大きな地理的共通點を持つてゐるのである。

その一つは、これらの三つの地方が、何れも東京・大阪の文化の中心地から、北に遠ざかつて、その距離に應じて、段々強い殖民地的色彩をもつてゐる、と云ふことであつて、假りに、樺太を殖民地とするならば、北海道は半殖民地、東北は、殖民地的地方である、と見られ得るのである。そして、この殖民地・半殖民地・殖民地的に相當して、即ち、北に行くにつれて、都市の發達及びその分布状態や、交通網の發達程度や、社會の發達状態などが、段々低下してゐるのである。

而して、今一つの共通點は、樺太・北海道・東北地方に於ける人々の生活が、土地の直接的利用、即ち、農業及び漁業に、その基礎を置いてゐると云ふことである。これは、近代的な科學文化の發達してゐない所では、共通なことであつて、世界の非工業地帯には到る所に見らるる現象である。勿論、北海道の夕張炭礦とか、秋田縣の小坂・阿仁・院内の鑛山とか、福島縣の磐城炭田とか、岩手縣の釜石鑛山とか、札幌のビール工業とか、苫小牧のバルブ工業とか、そのほか色々な特種な工業がないでもないが、まだ全般的に見てこれらの地方は、何れも工業發達の幼稚なところで、産業の前面に立つてゐるものは、依然

として、土地の直接的利用による農業と漁業とである、とみななければならないのである。

それ故に、二つの共通點と云ふのは、樺太・北海道・東北地方が、何れも殖民地的地方であると云ふことと、何れもその文化の基調を土地の直接的利用に置いてゐると云ふことの二つであつて、この共通點もつまるところは、これらの各地方に於ける地理的諸條件の本質の中に、その存在の根底をもつてゐるものである、と云ふことが出来るのである。

(二)

更に關東地方に移つて、關東地方の地理的特異性をみるに、支配的な地理的條件は、廣い關東平野で、この上に於ける上部構造としての人文上の支配的現象は、京濱工業地帯を含む大東京市の存在である。

即ち關東の大平野は、北部及び西部山地への漸移地帯には、養蠶・製絲を以て生絲及び織物工業を興さしめ、平野それ自體には米麥甘藷などの農産物を決定し、海岸地帯には、漁獲物を以て漁業を盛ならしむる手段を與へ、以て工業を發達せしむる社會分業の自然的

基礎を提供してゐるのである。

だからこそ、京濱工業地帯は、關東平野からの生産物の上に、また外國からの輸入品の上に、その基礎を於いて發達してゐるのであつて、この工業地帯の成立と云ひ、大東京市の存立と云ふも、その根本は、畢竟、何れも關東の大平野の本質の中にあるのである。それ故に、關東地方の特異性は、關東平野の機能と、大東京市の活動とによつて決定されるもので、關東の文化は、この二つの特異性の上に存在してゐるのである。

更に、中部地方の地理的特長をみるに、地理的條件としては、中央的な位置と、アルプスを包む高山性と、日本海・太平洋斜面に於ける廣い平野との三つであつて、この各條件の内面的關聯の中に、さらに中部地方の産業上の或は文化上の特異性が存在してゐるのである。

即ち、中央的な位置は、中部地方に、關東文化と關西文化との混合文化を展開せしめ、多くの峻峰を持つてゐる高山性は、アルプスや、富士山のもつ山の魅力によつて、多くの

人々を引きつけ、且つ高山性な生産物を決定し、更に中部地方の平野は、新潟縣に、米及び石油を興へ、金澤・福井に羽二重及び絹織物工業を興し、名古屋一帯に、二億六千萬圓の本邦第一位の織物工業を興さしめ、靜岡に茶と蜜柑との生産を可能ならしむる手段を興へてゐるのである。

が、然らば、中部地方の支配的の地理的條件は、何かと云へば、それは高山性をもつた中央的な位置である、と答へるより外に仕方がなく、現存する中部地方の一切の文化は、皆この中部地方の本質的にもつてゐる中央的の位置そのものの中にある、と見ることが出来るのである。

更に近畿地方の特異性をみるに、ここには顯著な人文現象が二つある。一つは、阪神工業地帯の存在と、他は京都・奈良・伊勢に於ける神社佛閣による聖地の存在とである。今かりに、近畿地方から、この二つの人文的特長を取り除いたとするならば、近畿地方に於ける地理的存在價值は大いに減殺されるであらう。

勿論、この二つの特異性は、近畿地方の一般的対象条件、即ち、近畿地方の勝れた中央的位置とか、温暖な気候とか、リアス式の海岸とか、大小多くの平野とか、の総合的条件の本質の中にあることは云ふまでもないのであるが、この一般的対象条件の中で、支配的の条件は、なんであるかと云へば、それは平野と勝地とをもつてゐる中央的位置そのものである、と見なければならぬのであつて、この中央的な位置そのものの中に、阪神工業地帯と、京都・奈良・伊勢による神聖浄化の地帯との存在がみとめられ、更にこの二地帯の上に、現存する關西文化が存立してゐるのである、とみる事が出来るのである。

(282)

以上、説明した關東地方と中部地方と關西地方とは、樺太と北海道と東北地方とが、二つの共通点をもつてゐると同じ様に、これ亦二つの共通点をもつてゐるのである。

その一は關東・中部・關西の三つの地方が、何れも我國の中央的位置を占めてゐると云ふことで、今一つは、この三つの地方が、一般的にみて、農業よりは寧ろ工業を、産業の前面に置いてゐると云ふことである。

即ち、これらの三地方がもつてゐる中央的な位置は、近代的文化の發展に對して遺憾なく、その機能を發揮し、南は九州・臺灣から、北は北海道・樺太に至るまでの中間にあつて、あらゆる文化現象の媒介に努力してゐるのである。この三地方だけに、東京市をはじめとして、大阪・名古屋・神戸・京都・横濱などの人口五十萬以上の大都市が六つも集中し、商工業がさかんで、人口密度は多く、交通網も高度に發達してゐる、と云ふことは、要するに、これらの地方が占めてゐるその中央的な位置そのものに基因してゐるのであつて、南から、或は北から來た昔の人々が、早くから、ここに定着して、各思ひ思ひの生業に就き、以て今日の如き文化を展開したからである。

(283)

また他の一つの共通点である工業のさかんなことは、今更ここに喋々を要するまでもなく、京濱地方は、機械・印刷・船舶・ガラス・ビール・織物などを以て、福井・金澤地方は、羽二重・絹織物を以て、長野地方は製絲を以て、名古屋地方は綿絲・綿織物・毛織物・陶器・時計などを以て、更に阪神地方は綿絲・綿織物・造船・化學工業品などを以て、何れも産業の第一線に立たしめてゐることからでも、想像されるであらうし、また、これら

の三地方が、全體で四十七億圓の工産品を出して、内地總工産品の七八・三%を占めてゐることからでもその工業のさかんなことが察知されるであらう。

が、それかといつて、然らば關東・中部・關西の地方に、土地の直接的利用による農業・漁業が劣つてゐるか、と云ふにそうではなく、農業も漁業も非常にさかんではあるが、一般的にみて、それ以上に近代的工業が大いにさかんになつてゐるのである。

かかる意味に於ける工業の發達と、中央的な位置の機能とが、關東地方・中部地方・關西地方の共通な現象となつてゐるのである。

(三)

更に中國地方の特異性についてみるに、地理的條件としての主なるものは、廊下的な役目を果してゐる地理的位置と、全面的にひろがつてゐる高原性との二つをあげることが出来る。が、支配的の條件としては、寧ろ後者の全面的に分布してゐる高原性を、指摘することが出来るのであつて、この高原性が、全般的に行き亘つてゐる關係上、中國地方には

平野が少なく、牧畜と果樹の栽培とがさかんで、従つて、牛・桃・柿・夏橙・花筵・鹽などが中國地方の代表的な生産物になつてゐるのである。

更に四國地方の特異性をみるに、その地理的條件は色々あるが、支配的な條件は、高峻な四國山脈の存在で、この四國山脈が現存する四國文化の方向を規定する主なる自然的側面となつてゐる。

讃岐の鹽や、土佐の鯉節や、伊豫の蜜柑や、乃至は四國八十八ヶ所の遍路めぐりや、土佐の闘犬などは、みな四國山脈の高山性の中にその存在が認めらるるのである。

中國文化が、中國の高原性によつて規定されてゐると同じやうに、四國文化は、四國の四國山脈によつて、その方向が規定されてゐるのである。

更に九州地方の特異性についてみるに、支配的な地理的條件は、九州が朝鮮・滿洲・支那に對して、近接的なすぐれたところにあると云ふ地理的位置と、並に北九州の炭田をふ

くむ平原との二つであつて、この二つの地理的條件の上に特異な九州文化が存在してゐるのである。北九州工業地帯の發達、多くの勞働者と多くの近代的工場との存在、九つの開港場の活躍、長崎港をはじめ、多くの西斜面に於ける良港の發展、漁獲物の多いこと、米・甘藷・煙草の生産の多いことなど、これらは、みな上述の二つの支配的な地理的條件の本質の中にあるのである。即ち地理的位置と、炭田をふくむ平原とが、九州の支配的な地理的條件で、石炭と農産物と漁獲物とが代表的な生産物で、この上に特異な九州文化が依存してゐるのである。

(286)

以上、中國と四國と九州との三つの地方をみるに、ここにも亦、地理的共通點が二つ認めらるるのである。

即ち、一つは、この三地方が、何れも我國內地の南にあつて、中央的位置を占めてをらず、各個別的な位置を占めてゐると云ふことで、今一つは全般的にみて、これら三地方の人々の生活の基礎は、土地の直接的利用、即ち農業と漁業との上に置かれてをって、固有な工業の上には置かれてゐないと云ふことである。勿論、これらの三地方は樺太・北海道・東北地方よりは、一般的に工業が發達して、より工業を前面に進ましめてはゐるが、關東・中部・關西地方ほど、進ましめてをらず、まだ依然として、農業と漁業とをその前面に立たしめてゐるのである。

(四)

更に臺灣の特異性をみるに、支配的な條件は、臺灣に於ける熱帶的な氣候で、これが臺灣文化に影響を與へる主なる要素になつてゐる。

炎熱やくが如き臺灣の暑熱は、米・茶・砂糖・甘藷の四大農産物以外に、その農産物を麻・バナナ・パイナップル・落花生・樟腦などの熱帶性農産物に制限し、その上、その酷暑は、人口の九割二分を占むる本島人の精神生活を鈍らせ、以て習性に強い影響を與へてゐるのである。

かかる本島人の熱帶的な生活と、熱帶的な農産物と、熱帶的な氣候との三つが、臺灣に

(287)

於ける支配的な人文及び自然の條件になつてゐるのである。

最後に朝鮮をみるに、地理的の條件は、内地と滿洲との間に於ける廊下的の位置と、大陸的の氣候と、西斜面に於ける平野と、全般的の山地と、漁獲の多い海岸との五つであつて、この各條件の全關性の中に、今日の特長ある朝鮮文化が存在してゐるのである。が、強ひて、上述の五つの條件の中から、支配的の條件を求むれば、それは朝鮮の西斜面に於ける平野で、これが朝鮮の經濟文化に影響を與へる主なる條件となつてゐるのである。

かくして、社會的側面に於けるものは、臺灣と同じやうに、米・麥・粟・甜菜・人蔘・棉花・煙草などの農産物で、これに用材と牛と魚類とを加へて、これらが全體として、朝鮮の人々に對して、生活發展の形式を規定する契機となつてゐるのである。

そこで、滿洲と内地との中間的な位置と、農産物との二つが、朝鮮の主なる特異性であることが知らるるのである。

以上の臺灣と朝鮮とに對しても、ここに我々は二つの共通點を認めることが出来るのであつて、それは各完全に植民地であると云ふことと、何れも農業を産業の第一線に置いてゐると云ふこととで、この二つが共通な特長になつてゐる。勿論、朝鮮・臺灣に固有な工業が、ないことはないが、まだそれは經濟構成の主なるものにはなつてゐないのである。

(五)

ここまでで、大體我國に於ける各地方の支配的な地理的條件と、指導的な人文現象(生産現象)とを、拾ひあげて來たのであるが、その主なる地方、即ち現在の我國に於ける政治・經濟・交通・軍事に對して、中心的勢力を占めてゐる地方は、關東・中部・關西の三つの地方で、この地方だけが、全般的にみて、農業よりは工業を産業の前面に進ましめてつて、近代的な技術による科學工業は、この三地方から展開されてゐるとみることが出来るのである。従つて、この三地方には人口密度が多く、五十萬以上の大都會が、六つもあり、交通網が高度に發達し、その上、大阪・神戸・名古屋・東京・横濱などの如き代表

的な港を以て貿易及び商業が、これ亦極めてさかんであり、剩へ嘗て政治の中心であつた奈良及び京都をひかへ、且つ現在の政治の中心である東京をも包括してゐるのであつて、云はば、現在に於ける日本文化の光は、この三地方から發せられつつある、とみても敢て過言ではないのである。

而して、これらの地方に次いで、社會の一般的發展過程の途上にあるものは、中國・四國・九州の三地方で、これらの地方にあつては、もとより農業が、その前面に立つてをることは云ふまでもないが、それでも、固有な工業は、徐々に力強く、第一線の農業に接近しつつあるのである。従つて人口密度も、大都會の數も、交通の密度も、關東・中部・關西の三地方の發展状態に段々近づきつつあるのである。

が、これらに對して一方、東北・北海道・樺太・臺灣及び朝鮮の五つの地方は、何れも植民地か、半植民地か、或は植民地的地方で、これらはみな、生活の基礎を、土地の直接的利用、即ち農業と漁業とに置いてゐるのであつて、固有な工業は、所々にあるにはあるが、まだすつとおくれてゐるのである。従つて、人口密度も稀薄で、地方的な聚落や、町

はたくさんあることはあるが、まだ大都會と名づくべきものは、極めて少ないのである。

(六)

かくのごとく觀察してみると、必然的に、ここにおこつてくる問題は、地理區に關する問題である。

この地理區については舊い言葉では、地區だとか、地方だとか、新しい言葉では獨逸のランドシャフトに相當する景觀だとか、景相だとか、景域だとか、で表現され、また英米のユニット或はエレメントに相當する單位だとか、單元だとか、で表現されてゐるが、何れにしても、それはある一定の地域を指定するものであることにはまちがひはない。そこである一定の地域を意味する關係上、それはどういふある一定の地域であるか、如何なる標準によつて定められた或る一定の地域であるかと云ふことが問題になつてくる。ここに地理區設定について、いろいろな方法や、議論が生じてくることになるのである。

が、一般には大きく二つに分けて、自然的要素による地理區と、人文的要素による地理

區とにわけることが出来る。しかし、自然的要素と云つても、山とか、川とか、平野とか、海岸とか、色々な要素があるし、人文的要素と云つても、政治・經濟・交通・軍事などに關する色々な要素があるので、ここに多くの自然的、或は多くの人文的地理區が決定され得ることになる。しかも、この際に多くの人々は、人文的地理區を、何等かの形式で、自然的地理區に（或は逆に）一致させようと努力してゐる傾向がないでもない。何故に一致させやうとするかの眞意はわからないが、かくすることは、恐らく、たいした意味のないことで、人文的地理區が、何時でも自然的地理區に一致しなければならぬと云ふ理由は、全然ないのである。例へば、中部地方なら中部地方が、假令、今日はつきりした自然的地理區と一致してゐなくとも、中部地方の人文地理を説くにあつて、それは一向差支へないことであつて、自然的地理區と一致してゐなければ、一致してゐないと云ふことそれ自體が、對象の確たる基本概念となつて、この上に因果的説明が成立するのである。故に、中部地方が中部地方としての錯綜した、混合した文化をもつてゐるならば、それは中部地方の錯綜した自然的地理區の本質の中にその原因を求めることが出来るのである。

最近、よく日本に於ける地理區の設定と云ふことが問題になつてをるが、或は氣候によつて地理區を設定したり、或は單なる地形によつて決定したり、或はぼんやりと一切の自然地理的要素によつて確定したりすることが行はれてゐるが、自然的要素によるこれらの試みは、試みそれ自體以外に對してはあまり意味のないことであつて、如何に忠實に氣候或は地形による地理區が設立されても、單なるその設定だけからでは、何等の結果も得られないのである。それは、云はば地理的諸條件、例へば山とか、川とか、平野とか、海とかを、ただ正直に羅列しただけでは、それからは何等の成果も得られないと同様である。と、いふのは、かかる氣候や、かかる地形は、固定的な要素、つまり非歴史的な要素で、積極的に人々の生活を左右し、人々の労働を強制すると云ふやうなものではなくして、それは單に衣食住に必要な原料素材の獲得に對して、人々に自由な撰擇をなさしめ、以て文化が形成される手段を、單なる手段を、提供してゐるに過ぎないからである。それ故にかかる固定的な要素や、かかる固定的な地理區からは、あらゆる經濟文化の變化性や發展性は説明することが出来ないであつて、それは單に、ある一定の物の發生を説明するに

際して、單なる一方面的機能として説明されうるにすぎないのである。

故に若し、我々が、何等かの地理區の設定をしなければならぬとするならば、それは、自然的要素による地理區の確定ではなくして、人文的要素による地理區の決定を必要とするのである。政治形態にしる、生産形態にしる、交通状態にしる、その標準は何であつても、とにかく、社會的側面からの、地理區の設立を、行はなければならぬのである。そしてかかる地理區が出来たならば、然る後に、その地理區と、その地理區内の自然とが、如何なる關係をとり結んでゐるか、如何なる仕方に於て、その自然と相調和してゐるか、といふことを究むればよいのである。故に、地理區設定については、人文的要素によるものを先にして、自然的要素によるものを後にすべきではなからうかと思はれる。と、いふのは、自然を先にするときは、現象それ自體を、分析批判すると云ふ人文地理一般の目的に反するばかりでなく、第一、固定的な自然それ自體からは、何物をも説明することが出来ないからである。

筆者が、これまで取扱つて來たところの關東地方とか、東北地方とか、關西地方とか云

ふやうなものは、人文的要素である幾つかの行政區劃の集合によつて構成されてゐるもので、従つてこれらの地方が、必ずしも常に、地形や氣候による地理區と一致してゐるとは限らず、むしろ一致してゐない方が多い位である。が、我國の行政區劃による地方が、はつきりした地形による地理區に一致してゐやうと、おまいと、それは該當地方内の人文現象をとくにあたつては、少しも差支へないところで、一行政地域内にどんな複雑した、どんな不統一な自然的地形があらうと、その行政地域内に於ける經濟文化現象は、要するところ、その行政地方内に於けるかかる複雑した、不統一な自然と、その行政地域内に居住する人々との、交互接觸の中に存在してゐるからである。

だからこそ、ヘットナーの所謂「場所の異なるにしたがつて、異つてゐる現象は、結局に於ては、また異つてゐる地理的條件を持たねばならぬ」と云ふことが、肯定されるのである。

かかる意味に於て、今日、我國に設定されてゐる行政區劃を、或はその行政區劃による地方を、單に自然的な地形などに一致しないと云ふ簡單な理由からだけで、變更しようと

する企のごときに至つては、恐らく、全然意味をなさないものであらう。

(七)

が、とにかく今日我國には、關東地方を始めとして、東北・中部・關西・四國・九州など……都合十二の、行政區劃による地方が、所謂花綵列島の上に於て、各思ひ思ひの自然をとり入れて、これに思ひ思ひの人間を定着せしめ、北は亞寒帶の樺太から、南は熱帶の臺灣に至るまで、長く、廣く分布してゐるのであつて、しかも各地方は、場所の異なるに従つて、異つてゐる現象を遺憾なく發揮せしめて、樺太にはパルプ工業、北海道には水産業、東北日本には林檎、西南日本には茶と蜜柑、關東・中部・關西には各種の工業、臺灣には茶・バナナ・甘蔗などの多角的の生産をなさしめ、以てその地方地方に特異な文化が形成される手段を與へてゐるのである。

かくして、十二の各地方から展開されてゐる特異な經濟文化は、眞に總體的に、所謂日本文化なるものを構成してゐるのである。換言すれば、我國の地理的位置と、溫帶的な氣

候と、高峻にして廣く分布する山脈と、狭小な平野と、海流とともに漁場を持つ海岸線との五つの地理的條件と、九千萬の國民との交互接觸の中に、現存する大和文化が存在してゐるのである、と見ることが出来るのである。

第十五章 總論 (下)

先づ、我々は、我國の地理的條件として、主なるものを、五つ指摘することが出来る。第一は、我國が、亞細亞大陸の東端に於て、四億五千萬の消費者をもつところの支那に接してゐる地理的位置と、第二は、廣く植物の種類を多角的ならしむる熱帯から、亞寒帯に至るまでの氣候と、第三は、北彎南彎を以て全面的に分布する多くの山脈と、從つて第四は、狹小なる平野と、そして最後は、海流に恵まれて、ゆたかな漁場をもつ海岸との五つである。そして、これらの諸條件の全關性の中に、土地の直接的利用による農業と、漁業と、竝に鑛業とが存在してゐるのである。

即ち、我國に廣く分布する山脈及び山地は、三億五千四百萬圓に達する木材及び林野産物の産出に貢獻し、また約五億圓に達する鑛産物の採掘に關係し、更に我國の平野は、そ

の地方地方に於ける氣候と共に、約四十八億圓に達する農産物（繭を含む）の生物に關與し、その上、三百八十萬頭の豚と、三百五十萬頭の牛と、百六十萬頭の馬などの飼育を可能ならしめ、更に暖流と寒流とに恵まれて、豊かな漁場を持つ海岸は六億六千萬圓の漁獲物及び水産製造物の生産に與らしめてゐるのである。

つまり、我國の自然は、これらの原料素材を人々に與へ、これらをして、その地方地方に於ける人々に對して、生活發展の形式を規定する社會的分業の自然的基礎たらしめてゐるのであつて、また、これらの原料素材の上に我國固有の工業が發達してゐるのである。勿論、それと同時に、棉花だとか、羊毛だとか、護謨だとか、の輸入品の上に於て、特種な工業が發生してゐることは云ふまでもないが、兎に角、かかる意味に於ける我國の固有な工業と特種な工業とは、昭和五年に六十億圓（同四年は七十七億圓）の工産品を出して斷然、我國に於ける産業の第一線に立つてゐるのである。

かくのごとく、我々日本人が、原料素材を、我國の自然から引出し、また、これを輸入して、これらを製品として配給するまでの長い一聯の行程の中に、商業・工業・交通業・

其他に關する地方的に特有な現象が生じてゐるのである。例へば、六萬二千の工場が、百七拾萬の勞働者を以て、廣く全國に分布してゐるとか、或は二萬八千軒に亘る鐵道や、四百萬噸に達する船舶が、内地及び植民地に於て交通運輸に活躍してゐるとか、或は六百八十の多くに達する人口一萬以上の都市が、何等かの居住形態に於て分布してゐるとか、或は二萬五千六百の小學校から、四十の大學に至るまでの各教育機關が、廣く津々浦々に行き亘つてゐるとか、兎に角、色々な我國の自然的或は社會的環境に應しい現象が生じてゐるのであつて、これらの現象の上に、またこれらの現象の中に、上部構造として日本固有な精神文化がつくられてゐるのである。

要するに、米・生絲・綿糸・絹織物などに基礎を置く我國の特異な物質文化と、忍耐・勤勉・郷土愛・忠君愛國・大和魂・武士道などに基礎を置く我國の固有な精神文化とは、究極に於ては、上述の五つの地理的條件、即ち、日本の自然と、日本に居住する九千萬の人々との、交互接觸の中に、存在してゐるものである、と見ることが出来るのである。つまり、日本と云ふ大自然は、直接には、原料素材の獲得に對する可能性を與へ、従つて、

これが爲めに、間接には、固有な日本文化が形成される手段を與へてゐるものである、と見ることが出来るのである。

かくの如き觀點から、即ち、我國の地理的諸條件が、我國に現存する經濟文化の内容に、如何なる影響を與へてゐるか、と云ふ見解から、總論的に、日本の人文地理を説いて見たいと思ふ。

(一)

それで先づ第一に、我國が、亞細亞大陸の東端に於て、大きな四億五千萬と云ふ消費力を持つ、支那に接してゐる地理的位置が、我國の經濟文化の内容に如何なる影響を與へつつあるか、また滿洲國を隔てて一億三千萬の人口をもつ、プロレタリア獨裁のソヴェート・ロシアに接してゐる位置が、我國民にどんな影響を與へつつあるか、また自然的障害物として、太平洋と云ふ龐大な面積を間に置いて、あの拜金主義的なプエリタニズム的な亞米利加に接してゐる位置が、我國の政治・經濟・交通・軍事に、如何なる影響を與へつつあ

るか、と云ふやうな、我國が現に本質的に持つてゐる地理的位置の機能について説明しなければならぬのであるが、これは既に第一章の緒論の際に概略説述したので、ここでは單に、一億三千萬の人口を以て發達の途上にある、と云はれてゐるロシアに接してゐることは、あの龐大な支那に接してゐることが重大であると同じやうに重大である、と云ふことだけを述べて省略したいと思ふ。

(二)

そこで第二の地理的條件たる氣候の影響についてみるに、我が國の變化にとむ氣候は、廣く農産物の發生とこれが種類に關與して、一方的な勞働手段となつてゐるのである。

即ち、大麥小麥は、秋田縣・山形縣・富山縣などの裏日本や、四國地方には概して少くして、岩手縣・宮城縣から關東地方・中部地方の表日本式氣候の太平洋岸に多く、裸麥は中國・四國・九州の内海式氣候の地方に多くして、北日本には少なく、甘藷は關東以南の南日本、殊に九州・關東・四國地方には多いが、稍大陸的な東北地方や、北海道地方には

非常に少なく、また茶種は大體に於て南日本に多く、葉煙草は栃木縣・茨城縣・福島縣の關東北部と、徳島縣・廣島縣・岡山縣の内海の一部と、南九州の鹿児島縣とに多く、更に林檎は青森縣・北海道、或は寒い長野縣に多く、これに對して、蜜柑は主として静岡以南の南日本に多く、北に行くにつれて減少し、東北や北海道には皆無の状態である。勿論、溫暖の氣候と、モンスーンのもたらす雨とによつて、全面的に、米の生産が行はれてゐることは云ふまでもない。

が、兎に角、日本列島が弧状をなして、西南・東南に長く延びてゐるが爲めに、熱帯から亞寒帯に至る迄、種々な氣候が生じてゐるのであつて、日本のこの變化に富む氣候は、植物の生育に影響を與へて、これが種類を豊富ならしめ、以て南は臺灣から、北は樺太にかけて、農産物の生産を多角的ならしむる手段となつてゐるのである。即ち上述以外に、臺灣にバナナ・パイナップル・樟腦・甘蔗とかを決定し、北海道・樺太に甜菜とか、パルプ用のエゾ松・トド松とかを規定し、また内地には廣く桑園を以て繭の生産を促してゐるのである。

従つて、我國の變化に富む氣候は、それが富源獲得に關する限りに於て、人々の收得能力に、一時的か繼續的か、何れかの強い影響を與へる手段となつてゐるのである。例へば臺灣の熱帶氣候を利用して、バナナの生産に關與する人々と内地の溫暖な氣候に依つて茶や蜜柑の生産に働く人々と、樺太のバルブ業に従事する人々と、或は養蠶・製絲業に従事する人々との間には、自らそこに、収益の上に相違があるのであつて、それは、個人的な収益上の相違ばかりでなく、地方團體的にも大きな相違があるのである。それ故に、自らそこに、生産物に規定されて、貧しき地方と、富んだ地方とが出来て、収益が均霑されない、といふことになる。ここに於て、我國の變化にとむ氣候は、人々と、その經濟とに對して必要な収益性の相違を促す強い手段となるものである、と斷言することが出来るのである。かくのごとく、氣候は、直接的な土地の生産に影響を與へるばかりでなく、その雨期の長短や、濕潤性の度合は、各工場に於ける生産能率に影響を與へ、また紙・カカオ・製粉・鹽・菓子などの製造工業に對しては、濕潤性に耐へ得る特別な技術が、必要とせられ、剩へ、我國の固有な居住形態や、世界獨特な衣服の様式にまで影響が與へられて

ゐる。我々の袂は、我國の濕氣の爲めだ、とか云はれてゐるが、袂の發生論は兎に角として、夏の夜に、浴衣がけで、涼しい風に、身體を弄ばせながら、散歩する氣持よさは、濕潤亞熱帶の日本の氣候にのみ許された特權であらう。

更にまた、氣候は、人々が移動と自然への適應性とを條件とする限りに於て、人々の定着性を左右するものであつて、北樺太に於て、植物をも麻痺せしむる様な、攝氏零下三十九度以上に遠する寒さの敷香地方や、南臺灣に於て、人々の活動力を削ぐ様な三十六度に達する暑さの臺東地方や、或は北鮮・北滿の寒暑の差の著しい地方などは、何れも身體の强健な、環境に適應し得る人々のみを呼び寄せて、そこに定着せしめてゐるのである。同じ内地のうちに於いても、身體が弱く、比較的溫暖な氣候を求める人々は、海岸地方とか、或は九州に下つて職を求めるとか、また、身體の丈夫なものは、北海道や樺太の酷寒に抵抗しつつ、森林で働くとか、兎に角、我國の氣候は、何等かの形式に於て、我國の人々の定着性に強い影響を與へてゐるのである。

これを要するに、我國の變化に富んだ氣候は、多角的な生産を決定して、地方地方に收

益性の相違を促し、生産能率や、工業の製造工程や、居住形態や、衣服の様式や、人々の定着性に影響を與へる手段となり、また、その氣候の週期性、即ち春夏秋冬の巡り巡つてくる週期性は、春には春の生活、秋には秋の生活を以て、廣く我々の經濟生活を決定する手段となつてゐるのである。つまり、我國の我國だけがもつてゐる特種な氣候は、我國の固有な經濟文化の仲介者であり、廣く我國に於ける經濟成果の一面的支配者である、と見ることが出来るのである。

(三)

更に第三の地理的條件として、山脈・丘陵・高原などによる廣義の山地が、我國の經濟文化に如何なる影響を與へてゐるか、換言すれば、山地が生産の要素として、如何なる役割を演じつつあるか、と云ふことをみるに、廣く山地は、森林の繁茂と、家畜の飼育と、鑛物の埋藏とを以て、場所的に、或は量と質との上から、これが生産に關與して、直接には、これらの生産物に基礎を置く工業に、間接には廣く一般文化に、強い影響を與へる手段となつてゐるのである。

そこで、先づ山地が、關與してゐる森林についてみるに、森林は、内地が全面積の五二%、朝鮮が四二%、臺灣が五八%、樺太が五四%を占めて、日本全體は平均して五一・五%の森林面積を有し、これが廣く用材・薪炭材・竹材・林野産物の産出に關與してゐるのである。内地の用材産額は、杉・松・檜などによる針葉樹が、八千七百四十萬圓（以下昭和四年）、檜・栗・桐などによる闊葉樹が、一千六百十萬圓で、この合計が一億三百五十萬圓となり、これに七千二百萬圓の薪炭材と四百九十萬圓の竹材とを加へると、内地の木材伐採高は、一億八千萬圓に達する。この外、木材伐採高では、朝鮮が二千二百萬圓、臺灣が一千一百五十萬圓、樺太が一千一百七十萬圓で、これらを合計すると、我國全體の木材伐採高は、約二億二千六百萬圓に達し、これに松茸・推茸・樹皮などの林野産物の一億二千八百萬圓を加へると、我國全體の林産額は、約三億五千四百萬圓の巨額に達するのである。が、然し、用材の産額に對しては、我國は、アメリカ・ロシア・カナダ・獨逸・フィンランド・瑞典などには遠く及ばず、毎年一億圓に近い輸入、勿論、これは震災後で、最近

は減じて昭和四年に八千九百萬圓、同五年に五千三百萬圓になつてゐるが、兎に角、多額の輸入を仰いでゐる状態である。森林の全國土に對する面積から見ると、我國は五一・五%を以て、フィンランド・瑞典に次いで世界第三位で、二九%のアメリカや、三七%のロシアや、二五%のカナダよりは、はるかに多いが、その用材産額は、世界の第九位になつてゐる。これは、從來の木材關稅の安かつたことに原因してゐるでもあらう。が、他の原因は、我國の山岳が重複してゐるので、内地の奥山から切り出すよりも、アメリカの西海岸からもつて來る方が、はるかに安いことにも原因してをつたのであつて、こう云つたところにも、我國の地形の影響がうかがはれるのである。

更に、山地や裾野が關與する我國の牧畜についてみるに、牧畜は我が産業の中では、最も振はないものの一で、各種家畜の頭數は少ない。その頭數は、内地植民地を合せて、牛が約三百五十萬頭、馬が約百六十萬頭、豚が三百八十萬頭、綿羊が二萬四千頭、山羊が三十三萬頭で、牛は千葉縣・新潟縣に相當飼育されてゐるが、主として三重縣以南の西南日本、臺灣及び朝鮮に多く、これに反して馬は鹿兒島を始め九州の各縣には相當をるが、主

として岐阜縣以北の東北日本、殊に北海道に多い。が、しかし、これらの頭數を、世界各國の頭數と比較してみると、問題にならないので、今かりに人口百人に付いての家畜(牛に換算)をみるに、(昭和三年前後)オーストラリヤが四百八十七頭、アルゼンチンが四百三十頭、南阿聯邦が二百三十六頭、丁抹が百二十三頭、ロシアが七十五頭、アメリカが七十三頭、佛蘭西が五十頭、印度が四十七頭であるに對して日本は、内地が僅かに四頭、朝鮮が十頭、臺灣が十九頭のごく少ない割合になつてゐる。これから見ても、如何に、我國の牧畜業が貧弱であるかがわかるのである。また國內の屠殺獸肉類をみても、これは僅かに八千五百萬圓(昭和四年)で、これを百二十五億圓の世界の獸肉年産額から見れば、僅かに百五十分の一にしか當つてないのである。

かくの如く、我國の牧畜業の振はないのは、不適當な氣候とか、狭い牧場とか、少ない牧草とか、白人と食料の異なる點とか、色々な理由があるであらうが、その主なるものは我が國が園耕の形態をとつて、農耕の形態をとつてゐないと云ふことで、若し農耕をとつてをれば、必然的に牧畜業は、外國と同じやうに盛大になつたであらうと思はれる。が、

畜力によらず、人力を必要とする園耕形態をとつたために、我國の牧畜業は、かくのごとく貧弱なものになつてゐるのである。従つて、ここに於ても我々は、土地の狭小性が園耕形態を通じて牧畜に及ぼす影響を認めることが出来るのである。

更に、山地が關係する鑛産資源についてみるに、内地は三億八千五百萬圓の鑛産物を出し、植民地は一億一千八百萬圓を出し、日本全體は五億三百萬圓の鑛産物を出してゐる。このうち、三億三千六百萬圓、即ち全鑛産の六六・八％は、石炭によつて占められてゐるので、石炭が我が鑛産物のうちでは、最も主なるものとなつてゐる。これに次いで、七千一百萬圓の銅とか、各二千一百萬圓の金及び鐵とか、約一千四百萬圓の原油（石油）とかが主なるものになつてゐる。が、全體的に見た年産額は、アメリカ・獨逸・佛蘭西・英國などよりは、すつと少なく、我國の鑛産も、牧畜と同じやうに、豊富であるとは云はれないのである。これは、勿論、地質構造の如何に基因してゐるのであらうが、一は我國土の狭小性にもよつてゐるのであつて、我々はここに於ても、鑛産資源を埋藏しない土地の狭小性が、その國の生産經濟に如何に重大な影響を與へるものであるか、と云ふことを是

認することが出来るのである。

(四)

更に第四の地理的條件としての平野・平原が、如何なる機能を示してゐるかについてみるに、これは一に以て農産物の生産に關與してゐるのである。

農業は、我國に於ては、工業に次いで重要な産業で、植民地を加へた全體の農産物價額（繭を含む）は、四十七億八千八百萬圓の巨額に達してゐるので、單にこの生産額から見ただけでも、如何に我國の狭い平野が、十二分な栽培力・養殖力を發揮して、遺憾なく活躍してゐるかがわかるのである。そのうち、主なるものは、云ふまでもなく、内地の十五億八千五百萬圓を占めてゐる米であることは云ふまでもないが、これに次いで、六億五千五百萬圓の繭とか、二億七千萬圓の麥とか、約二億圓の蔬菜とか、一億一千万圓の工藝用農産物とか、八千四百萬圓の果實とか、が主なるものとなつてをり、これらは、氣候的條件と共に、廣く日本全體に分布して、地方地方の社會的分業の自然的基礎となり、以て人

人に収益性の相違を促してゐる。

が、これに對して、我國の耕地面積をみるに、これは五萬八千五百平方呎で、全面積の僅に一割六分にすぎないのであつて、六割一分を耕地にもつてゐる丁抹には遠く及ばないが、商工業の盛な英國（二三・四％）及び和蘭（二八・三）にすらも及ばないのである。

かくの如く、我國は耕地面積が少ない上に、人口が多いので、耕地一平方呎に付ての人口は、我國が世界第一位で、實に一千七十六人を支へてをり、これに對して英國は、八百二十六人、和蘭は八百二十人、白耳義は六百四十五人、加奈陀の如きは、僅かに四十二人を支へてゐるに過ぎないのである。これからみると、我國の狭い土地が、否狭い平野が、如何に多くの人口を養つてゐるかがわかり、同時に、我國の農業が、如何に高度に集約的に行はれてゐるかがわかるのである。

(312)

(五)

更に最後の地理的條件たる海岸が、我國の生産經濟に如何なる影響を與へてゐるかにつ

いてみるに、我國は四面海に取り圍まれ、且つ近海に暖流や寒流をひかへてゐるために、極めて豊富な魚群の棲息場を持つてゐるのである。従つて、我國は今日世界第一位の漁業國になつて、内地・植民地・露領沖の漁獲物は、四億七千萬圓（昭和四年）に達して、世界總産額の二四％を占め、これに一億九千二百萬圓の水産製造物を加へると、實に六億六千二百萬圓の巨額に達するのである。漁獲物のうちで、主なるものは、二千六百萬圓の鱈を始めとして、二千四百萬圓の鯛、二千二百萬圓の鮪、二千萬圓の鰹、各一千萬圓内外の烏賊・鮓及び鰈・鯖・鯧・鰯などであり、水産製造物のうちでは、一億五千八百萬圓の食料品と、二千三百萬圓の肥料とが主なるもので、この外に五百二十萬圓の魚油と、四百三十萬圓の寒天と、百萬圓の海藻とがある。兎に角、水産業は我國にとつて大に恵まれてゐる産業である。

(313)

(六)

これで大體、我國に於ける主要な地理的諸條件と、土地の直接的利用による生産との關

係について述べたのであるが、これらの生産物は、やがて我國に固有な工業を興さしむる自然的な基礎となつてゐるのである。

そこでこれらの基礎の上に於て行はれてゐる我國の主なる工業をみると、生絲工業を始めとして、人絹・パルプ・銅・鉄・鋼・木材・皮革・麻・砂糖・製鹽・豆油・製粉（小麦）工業などで、これらは何れも、その原料の五〇%以上は、純然たる我が國産品によつてゐるのである。が、これに對して、輸入原料の上に行はれてゐる主なる工業は棉花工業を始めとして、羊毛・護謨・輕銀・鉛・亜鉛・錫・石油・燐礦石・採油用種子などによる工業で、これらは何れも、その原料の五〇%以上は、純然たる輸入品によつてゐるのである。そして、これら兩者の原料による工業の生産額は、昭和四年に於て、實に七十七億五千九百萬圓の巨額に達してゐるのであるが、その翌年の五年には世界的不景氣の爲めに、五十九億五千四百萬圓に減少してゐるのである。この我國の工業中、主なるものは、二十一億七千三百萬圓餘の紡織工業で、これが全産額の三六・五%を占め、これ次いで九億五千四百萬圓（一六%）の食料品工業、九億一百万圓餘（一五・二%）の化學工業、六億

九千四百萬圓餘（一一・七%）の機械器具工業、五億一百万圓餘（八・四%）の金屬工業などで、これを表示すれば左の如くである。（昭和五年）

	生産額 (百萬圓)	總額ニ對スル 百分 比 %	主 要 事 業
紡織工業	二一七三・五	三六・五	製絲・綿絲紡績・業織物・絹織物・織物及交織物・莫大小
食料品工業	九五四・四	一六・〇	和酒・麥酒・醬油味噌・食酢・製粉・製糖
化學工業	九〇一・八	一五・二	工業藥品・染料・ゴム製品・製紙・人絹・肥料
機械器具工業	六九四・七	一一・七	電氣機械・絶緣電線・車輛・造船
金屬工業	五〇一・三	八・四	製鐵・製銅・製鐵鑄物
印刷及製本業	一九二・二	三・二	印刷・製本
製材及木製品工業	一六二・七	二・七	製材・木製品製造
窯業	一六二・五	二・七	陶磁器・硝子及硝子製品・セメント・珪瑯鐵器
其他工業	一九三・八	三・三	製帽・皮革製品・紙製品
瓦斯及電氣業	一七・八	〇・三	
計	五九五四・七	一〇〇・〇	

これが我が内地に於ける工業生産の一般的状態で、我が自然からの原料品による固有な工業と、外國の自然からの原料品による特殊な工業とから生産されたものである。

かくして、ここに出来あがつた製品の販賣配給に關して、商業貿易が興つてくるのである。結局、日本の自然界から原料素材を引出すか、或は外國から輸入するか、によつて、兎に角、先づ原料を獲得し、この原料を工業に移して製品とし、更に之れを取引・販賣すると云ふ長い一聯の行程のなかに、自らそこに、あらゆる各種の機關や、色々な設備がつけられ、以てこれらが、物質文化の基調をなしてゐるのである。例へば狹軌三呎六吋の二萬八千軒に亘る鐵道は地形に影響されつつ、盛に物資や人々を運送し、また噸數に於て世界第三位の四百三十萬トンを持つてゐる我國の船舶は、大型の客船主義よりは五千から八千トン級の貨物主義を以て、盛に活動し、また七萬二千の自動車と、五百三十萬の自轉車と、並に二百萬の荷車などによる小交通機關は、總延長九十五萬軒の道路に走り、また空には百二十一臺の民間飛行機と、六百臺の陸軍航空機とが活躍し、更に二萬五千六百の小學校、五百四十六の中學校、三十一の高等學校、四十の大學などや、四千五百餘の官公私

立の圖書館や、一萬五千の神社や、七萬一千の寺院などが津々浦々に分布して、精神文化向上に對する手段として遺憾なくその機能を發揮してゐる。

かくしてこそここに我國の勞働分業が生じて、職業別なるものが生じ、我國人口の五一・六%が、農業に従事し、二・〇%が水産業に、一・六%が鑛業に、一九・四%が工業に、一・六%が商業に、三・八%が交通業に、五・三%が公務自由業に、四・七%がその他の職業に従事して働いてをり、またかくしてこそ、これらの人々に對する活動の場所として、或は休息場・慰安場として、多數の聚落及び六百八十に達する人口一萬以上の都會が、到るところにつくられてゐるのである。そして、これらの現象の上に、またこれらの現象の中に、上部構造として、大和民族固有の精神文化がつけられてゐるのである。

(七)

これを要するに、約六十億圓の工業製品と、四十七億九千萬圓の農産物と、六億六千萬圓の水産物と、五億圓の鑛産物と、三億五千萬圓の林産物及びその他を、日本と云ふ與へ

られた自然の中から、また與へられた自然の上に於て、作り出すところに、現存する日本文化の根源が存在してゐると、見ることが出来るのである。つまり、魚・米・繭・茶などの我國固有な原料品や綿・羊毛・ゴム・石油などの輸入原料品に基礎を置いてゐる我國の物質文化と、忍耐・勤勉・郷土愛・忠君愛國・大和魂・武士道などに基礎を置いてゐる我國の精神文化とは、云はば上述の五つの地理的條件、即ち日本と云ふ自然と、九千萬の人人との交互接觸の中に、存在してゐると見ることが出来るのである。

かくみられるからこそ、我國の資源に乏しい土地の狭小性と、全面的に山脈に占められてゐる高原性とが、強く我國の經濟文化に影響を與へ、以てその文化の行くべき方向を規定する手段となつてゐるのである。勿論、この規定性は、今日現に存在してゐる文化に對してであつて、決して明日の文化に對してではないのである。と、いふのは、自然即ち地理的條件は、ただ或る一定の現象が進行しつつある間に於てのみ、人間と同權的に作用するもので、その他の場合は、何時でも、單なる動機を與へるに過ぎないからである。

が、しかし、自然に同權的な作用を引きおこさしむる原因を投ずるものは、多くの場

合(二三の例をのぞいて)人間の側から行はれてゐるのであるから、自然はどこまでも屬性として作用するのである、だからこそ、既に、上述したやうに、我國の固有な文化は、ひとりで我國の土壤から生れたものでもなく、また、季節風の雨から生れたものでもなく、それは、日本人の經濟文化を高めて行こうとする意欲そのものから生れたものであるが故に、我々は知識の獲得によつて、どこまでも、文化水準の函數を高め、自然界に働きかける力を、豊富にしなければならぬのである。

かくする時は、その力を受ける對象の性質が、多少貧弱であつても——日本の自然が貧弱であつても、我々の積極的な努力によつて、これを有利に展開せしむることが出来るのである。明治維新以來、文化の向上に對して、如何に多くの人々が努力して自然に働きかけ、これを克服して、以て有利に、展開したかは、今更茲に喋々を要するまでもなく、我國の赫々たる文化進展の跡が、これを證明してゐるのであつて、我々の求むべきものは、努力以外に何物もないのである。努力しなければ、何物も得られないと云ふことそれ自體が、既に我國の地理的諸條件の本質の中に、深く根ざしてゐるところであつて、我々ほど

こまでも努力に向つて突進しなければならぬのである。
かくしてこそ、五十鈴の流れは、永遠に清く、大和の櫻は、永久に咲きほこるであらう。

日本地理講話 (終)

昭和七年九月十二日印刷
昭和七年九月十五日發行

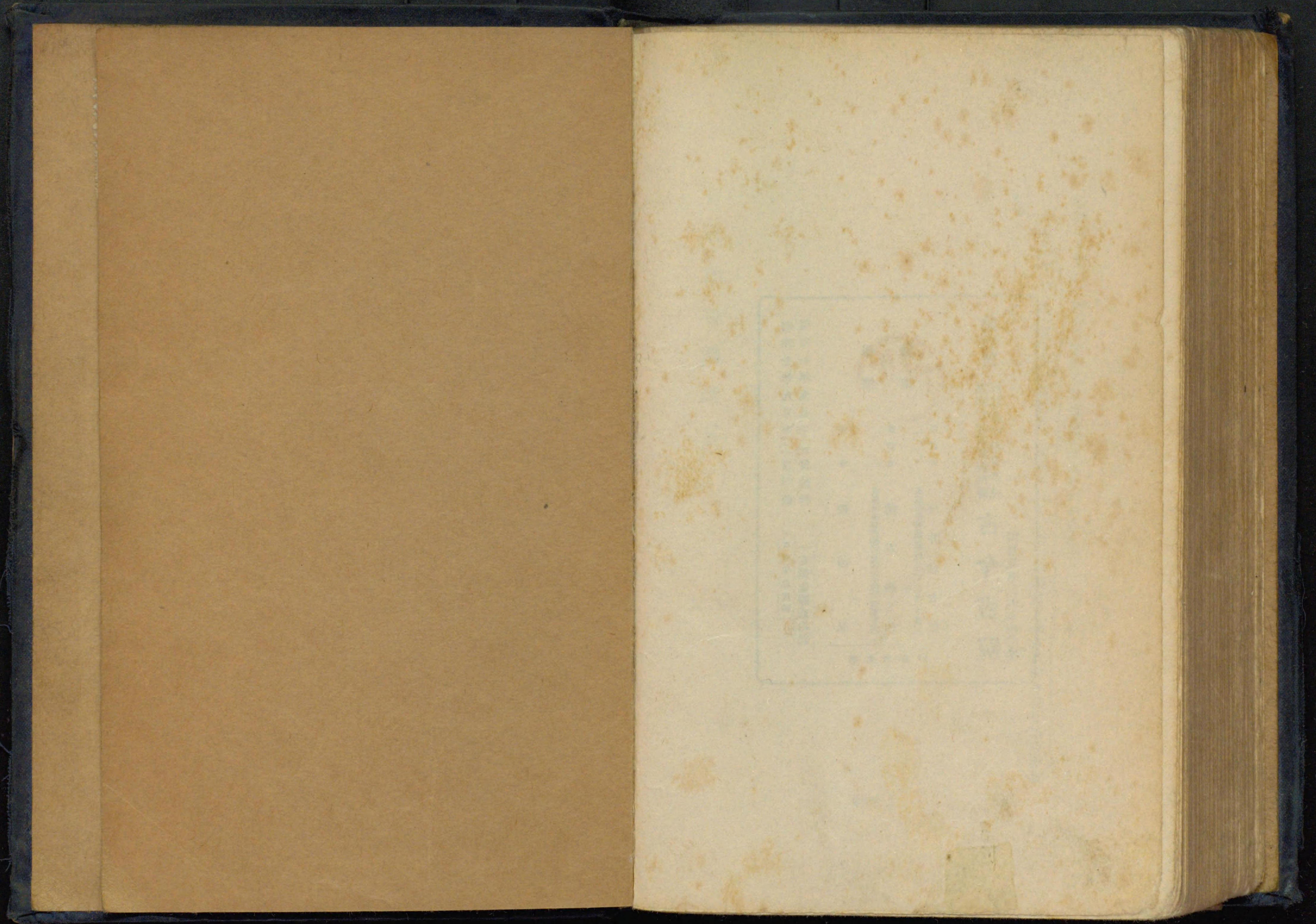
日本地理講話
定價壹圓貳拾錢



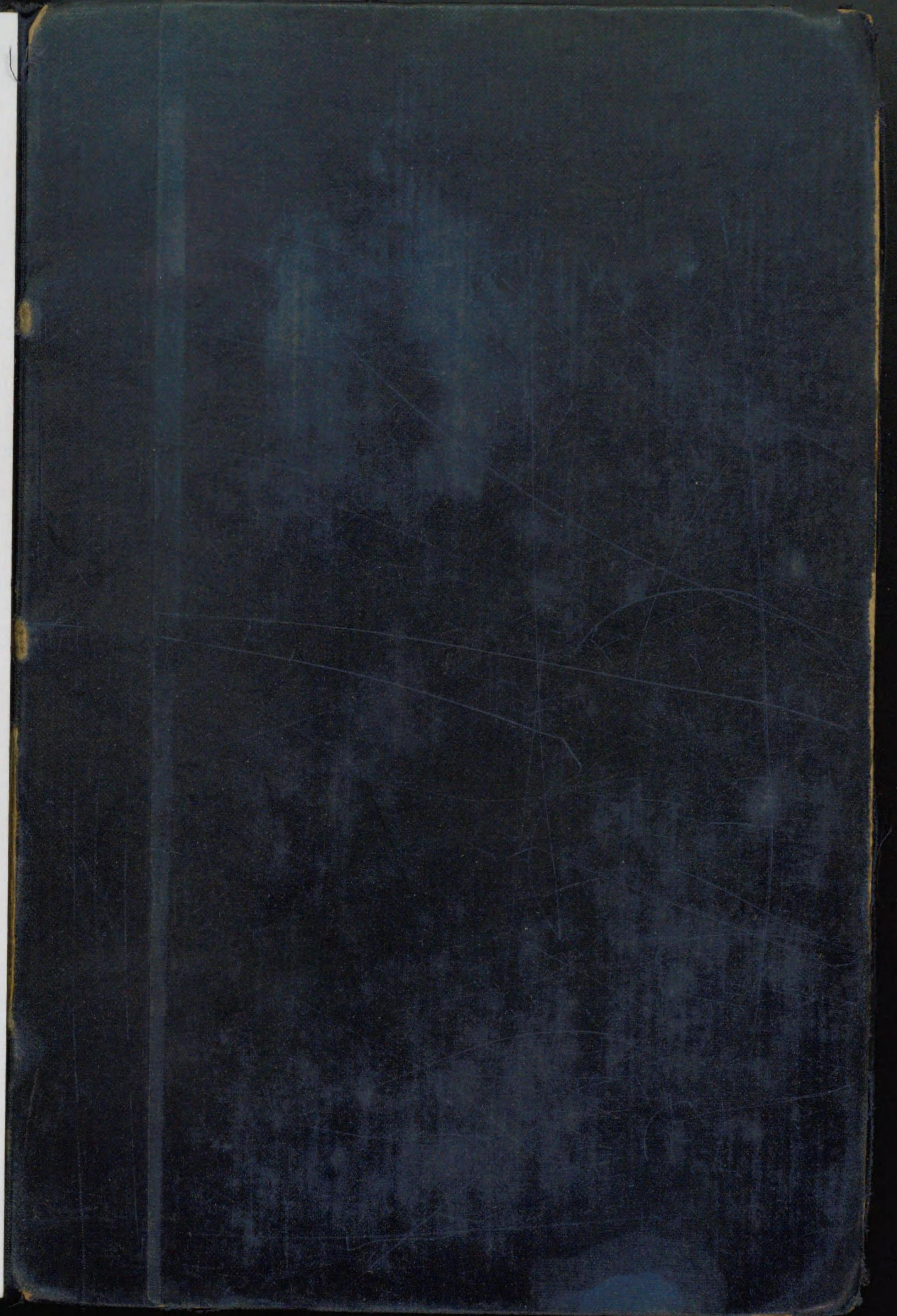
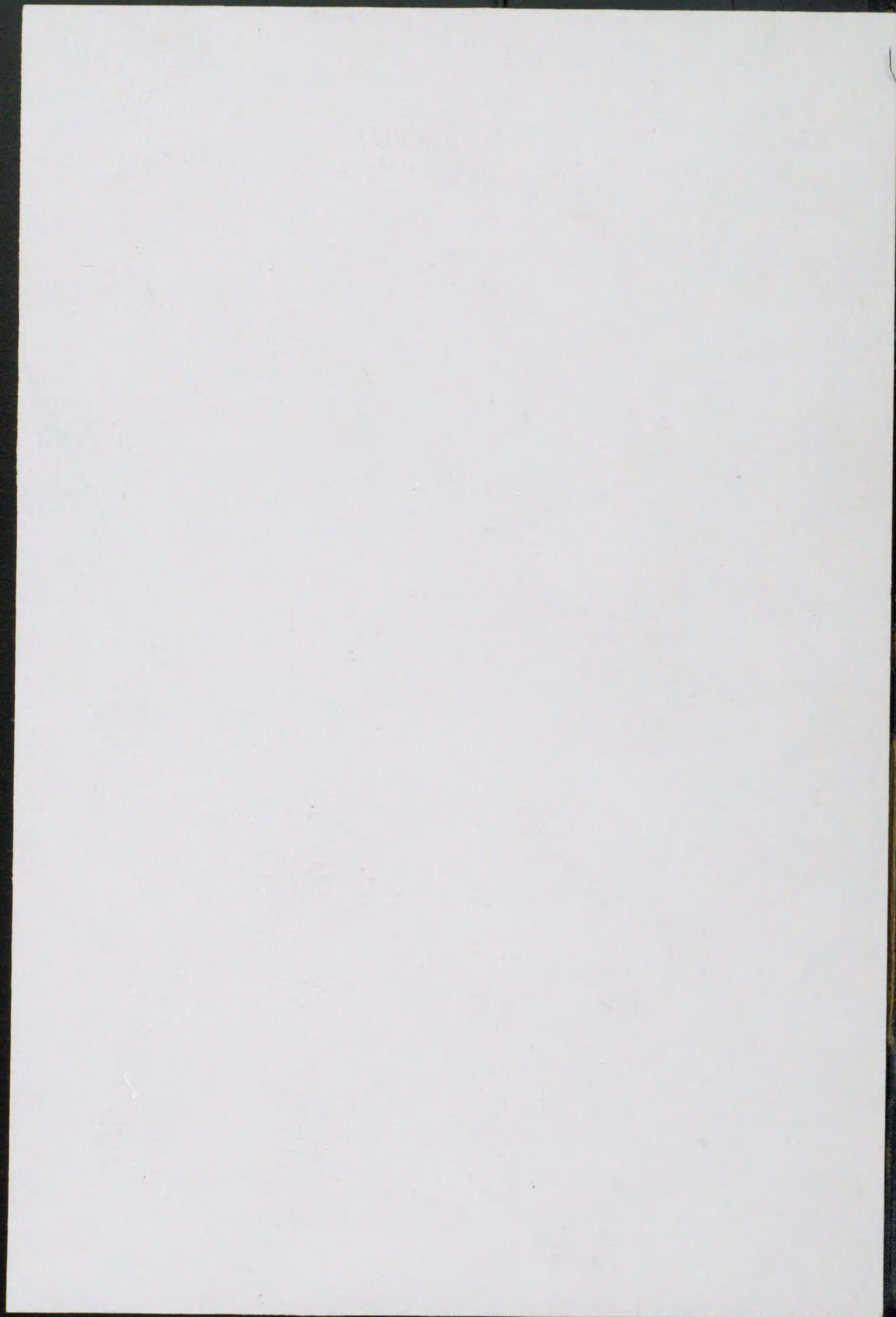
著者 佐藤 弘
發行者 橋本 福松
印刷者 白井 赫太郎
東京市神田區駿河臺西紅梅町拾壹番地
東京市神田區錦町三丁目拾七番地

發行所 東京市神田區駿河臺西紅梅町拾壹番地
古今書院
振替東京三五三四〇番

精興社印行



587
317

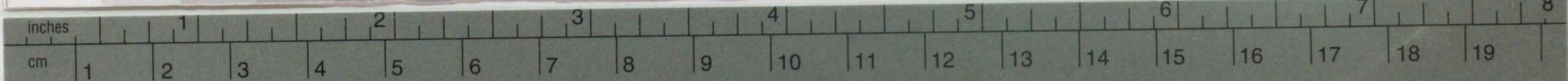


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

